明治廿九年

女學雜誌

二月刊行

第四百十九號

隨感

女學

懷故のなつかしさ
下女の貸金の談貸
勤倹と貯蓄(下)……藤井淡海
(子弟を出す父母の前辯 ○東京貯蓄銀行の貯金の勸め)

觀潮

晩婚　犯罪及び囚人　觀潮庵
所謂流行　婚姻及び葬儀費用
早稻田文學の雜界　婦人問題
歐洲諸國の人口減少　支那の乞丐兒
厚葬排斥と墳塋廢止

評論

波狀曲線論……有美堂主人
春夜漫錄……小此木秀野

雜錄

我心館……杜鵑子
斷腸の記……流水庵
寄野中至氏夫妻祝新婚……青柳猛
新婚祝歌三首

新刊書

女子處世論○桐一葉○青年小說○鳩の浮巣○大和武士

時報

明治女學校の類燒及巖本嘉志子の死去
高等女學教育の近狀其他

女學雜誌

第四百拾九號

隨感

明治二十九年
二月二十五日發兌

記憶を壓したる蓋

吉凶禍福の何たるを問はず、凡そ降かゝりたる人事の極めて激烈なる變化に出で會ひたるものは、之を語るだに狂情また動ぐを苦しむ、ましてや、之を筆にもらして文に綴るなどの余裕あるべきか。左ればとて別に怖ろしきものを見たりと望むやうなる感情も亦た存して、遠まはりに其周りを巡り、隱れながら其樣姿を窺がひ、少しづつ戸を開きては極底に壓沈したる熱火の焔を折々燃やしたしと思ふ心根の起り來るなり。少女が、紅き衣の一端をソト引出してかいまみるは何如に樂しくやあらん。苦きくるしき記憶を壓したる蓋を僅かに開きて其の慘風の吹き出るに顏を當つるときの感觸は、抑も誰にか語らん。あゝ默沈にある哉、緘默にある哉。

未だ文あらざる時

古來まことに無常を感ぜし人、其の尤とも切に之を感ぜし時や、如何に苦しかりけん。唯一つの慰さめとして之を文字に漏泄するの氣力もなかりつらん。祝すべし、彼人々、僅かに激情を沈めて即はち漸やく筆を執る、其の筆を握る比ほひ既に幾分の余裕ありとこそ言はめ。讀者、其文に同情を表するとを爲して、而も、文なき比の無文の狂歎あるとを察せず。古來の批評なるもの大率ね此邊に於て要緊を得ず。

衆と同に談論せん

眼中涙なく、口頭哀辭なく、冷々として忘れたる如く、ことに忙しくして、朝市の商人の如くするときこそ、秘密の鬱結の解露せんとする時なるべけれ。默するにあらざれば、大聲を發せん。ひとり物思ひするにあらねば、衆と同に談論せん。

何ぞ奪はれたりと言ふや

無邪氣なる小兒が其親に於ける如く、信じて只唯だ天地の御神に賴よる人こそ幸なれ。曩に與へられて、后ち奪はれ、昔許されて、今拒まれ、樂しき事と思ひしとの憂き事となりて、憂き事の倘此上につもらんかなど思ふにつけて、抑も最終最高の賴り所を何處に置かば則ち平安なる。嗚呼、行くべき方に行かでゝ果敢なき空だのめを爲し、屡ば欺かされて狂ひ騷ぐ絶望の人よ、何んぞ速に其元に歸り玉はざる。天豈に無情ならんや、神あに無益に懲らし玉はんや。すべての事、宜しからざるとなしと信じて初めて可なり。此の賜物は何ものよりも貴し。此の賜物を増し玉ふをこそ惠みと言はめ。之を増さるるとを辱くして、而して何ぞ奪はれたりと言ふや。

火の熱鞭と焔の舌

火の焔燃えあがり、焔の舌なめつくし、百年の大厦一朝にして灰燼に歸してゆく光景を目擊しつゝあれば、如何に有

形事業の脆くして、他に聖なる大御業の存するかを悟るとを得る也。火の焔は暫にして消ゆべし、炎の風評も遠からずして忘らるべし、幸ひにして代るべき高樓も築かるべし、人は之を見て元の如くなれりとなど祝し玉ふの日もあるべし。左れど、火の熱鞭と、焔の舌との教訓せし所は、冀くは永久に活動せよ。愚なる人の心は輕々しきものなり、祈るらくは、再び涙の御教へを促がしまつるの過誤を爲さゝれ。

嗚呼瓦よ石よ

嗚呼、棟よ、梁よ、木よ、瓦よ、石よ、汝等相別れ、相碎けて以て人の益を爲す。陳謝して其倒るるを送る、哭別して其殲ぶるを弔ふ。因緣暫らく絶え、交誼暫らく離る。嗚呼、諸の友よ、請ふ先づ行け。

之を失ひしにはあらざる也

家屋ある時や、其の在る處ろにのみありき。彼人ある時や、其ある所ろにのみありき。今や其形、吾が行く所に同にあり。其姿、吾が思の思ふ所ろに同に共にあり。之を失な

ひしと言はんか、抑も得たりと言はんか。試みに、想念して、其内に住ひ、其人と語れば、あゝ失せゆきしものは、形骸のみ。吾は未だ之を失なひしにはあらざる也。

斯る不肖の子

斯る不肖の子をすら、尚ほ用うべしと思ひ玉へばこそ愛の鞭をあて玉ふなれ。打ちて益なく、懲らして詮なくば、如何ぞ乃はち此の事あらんや。吾を吾と思し玉へばこそ此の教訓を下し玉ふ。何んぞ感激して其命を承はることをせざらんや。左りとても、此の愚かなるものを「人」にせんとて、種々の物は、砕かれ、種々の寶は失せ、多くの人は難儀にあひ、いや果てに再建しがたき破滅に歸せしものもあるなり。左れば、後にあるもの、又生のこれるものは、すべて此等に對しても亦た責を負へり。哀求す、皇天后土の聖なる父よ、願はくは、此の愚者を生かして其用を盡さしめ玉へ。

幽明の界、去現の間

全心熱愛をこめたるものの行くさきは、吾が全心熱愛の追ひ

行きて確かと留まり住ふ處なりけり。吾と同じき事に出であはん友よ、念ひを澄ませて靜かに眺めよ。吾が心意の行渡るべき領地はむしろ擴張せしにあらずや。感情の行くさきも遠くなりぬ。信仰の望む所も明白となりぬ。幽明の界髮一縷、去現の間、時刹那。斷ちがたき橋架之に渡りて、吾が思ひ容易く往來することを得るやうにとはなれり。

以て起つことを得べし

最大の力は、天の許して分ち賜はる所のもの也。此力、真識に映じ、自から感じて、上より來れりと覺悟するときや、千挫万折の決して遮ぎるを得ざる勢力の必らず伸張すべきことを確信す。此の覺悟と信仰と即はち最后の力なり。此の力あり、以て起つことを得べし。

此文の筆者近頃久しく筆を執らず、少しく文なるものを輕んずるの氣味あり。同人是非此の回の紙上に何事をか認めよと言われて而も久しく其感應を得ず。一夜同人皆な眠りて吾獨り机にむかひ、忽然筆を走らせて思ひ出るまゝを記したれど、再讀修正するの氣起らず。三無生識。

女學

懷故のなつかしさ

教育上、校舍の清潔ならんことを要むるは言ふまでも無きことながら、別に亦た舊るきを慕ふ情致の涵養に心掛くることを忘るべからず。此の情致を『懷故のなつかしさ』と云ふ、人情の至つて美なる所ろ、婦人に於ては取わけ欠く可らざるものなり。故に女子教育には、特に此が涵養を大切とす。

例せば、校舍の間取り、出口入口の模樣、廻り角の手の指に黒みたる柱、机椅子の列べ方、屢ば先生が顏を出し玉ひし窓、放課時間に友達と逍遙せし庭園、其かげに談話せし樹木、など云へるもの、皆な一々永久の紀念の目的とならざるはなし。平常日々之に慣るれば、左したる意味もなきものゝ樣に思はるれども、其の意味なきほどに意識せし慣れたる事物は、後に至つて悉とく懷故の姿となり、歷々憶起して、終生忘るゝと能はず。而して、之を憶起する每に當年の苦を回顧して、心頭一時に若やぎ、胸中俄然熱して情味言ひがたきの快氣を生ず、此の記臆の感觸ほど、人の情操を健康にするものは多くあることなし。

所云る、ホームを愛するの情なるものも、亦たホームに適するの情なるものも、同もに此邊の涵養より來ること多し。故に、屢ば校舍を變へ、もしくは、校舍中の間取、模樣、裝飾などを度々變移し、爲めに舊るきに慣れて之に融和することを得るの時日を奪ひ去るときは、學生の心自から躁ぎ、何時も定まらざる模樣を呈して、輕薄なる變革好きの態に流れ易し。之よりして、故舊にあつき殊勝なる人情を枯殺し、何事にも懷故のなつかしさと云ふものを感ずること薄くなりゆき、人としての床しみを失なふこと多かるべし。之れ實に教育上に於ける大患なり。

精神的の修養は、主に精神的の感化に由ること勿論なれど、また多く器械的、物質的の影響に由緣するの多きことを忘る可らず。熱心なる精神的教育者が、溢るる如き精神上の感化を施こし乍ら、而も學生の上に及ぼす影響の必らずしも良好有力ならざることの多くあるは、畢竟此の一事の注意を度外に措くが故なり。精神的々々々と稱へて、校內の模樣屢ば移動變化

し、融化慣熟せる懷舊の氣味いつも落着かざるときは、學生の感情自からソツケなく、稍ともすれば理窟ばくなりて、床しく、なつかしき、溫平たる情愛の發達せざるものなり。此の如き學生は、兎角、改革もしくは精神など云ふとを口ぐせの樣に言ひ做し、氣質偏僻固陋にして、矯激を以て誇りとなし、半ば狂氣ぢみたる片輪の氣骨を勇壯なるかの如く思惟するに至るものなり。齒にもかゝらぬ豆腐の如き軟骨には優ると言ふ迄もなけれど、さりとて敎育上には斯る矯激の子弟を養成するを大禁物となす。女子敎育に於ては、特に然り。むつくりとして溫健なるは、男子にも好けれど、女子には倘更なり。ホームに適し、ホームを樂しくすべき女王は、其の「ゆかしみ」と云へる香氣に存せざる可らず。此のゆかしみの多くは、懷故の情致より涵養せらるゝとを知るに於ては、校舍內の學校監理術なるものに注意するの切要なるとを辨識するを得ん。

下女の賃金の騰貴

近頃の毎日新聞に、日清戰爭後、細君の手に胼のきれると多くなれりと言へり。其譯は、手內職の注文隆盛となりて、下女は工錢の多きため其方に趣むき、奉公するものの太たく減じたるより、細君方親から臺所もとの水仕事して扨ては胼のきれると多くなりし故とぞ。こは、戲言にあらず、實際の事なり。

元來、下女の奉公人ほど廉價なるは尠かりし也。其の給金の上りゆくは至當の事と云ふべし。西洋人なども、本國に居てはなか／＼下女を置くは困難ゆゑ、中等の社會にても、買出し、水仕事など大抵は細君自身のするとなり。然るに、日本に來れば、下女の給金の法外に廉價なるより、一家にて二三人の奉公人をすら置く所ろあり。その本國の例しにすれば、彼地の王侯貴族のごとき權幕に倣ふものなり。而して其の能く斯の如きとをするは、必竟、日本の下女の給金の廉價なるが故なり。

もと廉に過ぎたるものゆゑ、追々に其の價格の上りゆかんは當然なり。蓋し遠からずして、三四十圓ほどの收入の家柄にては、下女一人を置くとすら困難となるに至るべし。左すれば其家の細君が親から臺所もとに働らかざる可からざるに至る

べし。
もと〳〵夫位の事は爲すべき筈なり。今の細君がたは、あまりに榮耀が過るなり。既に水仕事をせず、さりとて十分なる内助もせず、毎日〳〵、そも何事を爲さるゝや。
下女拂底の大勢は歎くべきにあらず。吾人は、これより細君方の活動を促し、随がつて臺所もとの改良を生じ、家庭の經理も一進歩すべしと信じて、むしろ此の時勢の來れることを賀するもの也。

勤儉と貯蓄

(三) 子弟を出す父母の勘辨

藤井淡海

昔大名の若殿原が多く暗弱なりしためしは、侍女の繊弱なる手にて育ち、上に對する下の者に褒めそやされて、憂きも悲しも知らずして、只管氣隨氣儘に生ひ立ち玉ふより、成長の後は忠臣義僕の諫めも用ひ玉はず、畢に城を傾むけ、其名を汚すの例めしあるなり。今の世にも其ならひあり、富める商家の子弟は、時勢に晚れ、識見卑く、進取の氣象に乏しきものあり、富める者の殊に注意して、其子弟を育つるには、世間を知らしめ、或は憂苦辛勞に遭遇せしめざれば、假令何程の富を成すとも、人に對して同情の念起らず、更らに世を益することなかるべし。故に富家の子弟を訓しめ、艱難苦行の修練をなさしむべきなり。
或人只管に子弟の立身出世を思ひて、或る銀行に出したり、余は其子弟を銀行などに出するの誤りなることを、說きたることあり、少年が銀行などにありて、日々に巨万の金圓出入の烈しき中に養なはれ、金錢は日々扱ひ馴れて、自然に其眞價を、忘れ、兎角大業の心生じて精細なる修養を欠き、他年自營自立の時に當りて、自己の成す所屑々として、潔ぎよからざるの心起り、過誤に陷ることなきにあらず、然らざるも今日銀行會社員などの贅澤にして、甚だ華奢に過ぎたるものあるは、其一例なるべし、由て未だ心の定まらざる少年には、勤勞の美風を學はしめ、質素の德を知らしむる、道に就かしめざれば、成長の后悔ゆることあるべし。
近江國神崎郡川並と云へる一村落は、其戸數三百餘戸ありて内一万圓以上の資産を有するもの百戸に餘まる、全國に斯る

富豪の村落あるとなし、此村に川島某なる人あり、巨万の富あるも、常に戒しめて、子弟には不自由と不足に耐へしめ、艱苦辛勞を嘗めしめざれば、心驕り氣高ぶり、祖家を繼承するに足らずとて、自家より遙かに格式劣り、資産の薄き者の家に、奉公せしめたり、是れ眞に近江商人が全國に商權を張り、名村町市に商舗を出し、今日の繁榮ある所以なり。

（四）　東京貯藏銀行の「貯金のすゝめ」

○貯金は天災不時災難の用意なり

世の中の災難は少なからざる其上に、いつ何時起るやら、誰れ知る者も非ずして、地震洪水不時災難の如き、防に道なき事柄には、貯金に若く者なかるべし、殊に東京横濱は火事の憂ひ多ければ、若其災に罹りし時商賣其外職業の障りとならぬやう、貯金こそ肝要なり

○子弟の貯金は獨立の氣風を養ふべし。

他人の厄介となる程の不甲斐なき事はなく、誰しも望む人はなけれども、其元を尋ぬれば、是れ皆子供の時よりして、貯へ心のなかりしより起るなり、親兄弟の敎へにて、聊か宛の小遣ひより、貯金の道を授けなば、其預け金には年々利に利の重なりて、成人なせし其時は、他の厄介になる事なく、知らずしらざる其内に、商賣其他の資本となり獨立獨歩の、立派なる人となるには疑ひなし、偏に子供の内よりして、心掛こそ肝要なり。

○貯金は病み煩ひの不幸を救ふ資金なり

男女老若の差別なく、病み煩いの事なくば、此上の悦びは非らざれど、世の諺に人は病の器なり、時を定めず所を嫌はず身に降りかゝり來る憂き苦勞、若し貯金なきそのときは、病苦は倍重くなり、不幸に不幸を重ぬべし、常に貯へつゝあるならば、塵も積れば山となり、心も自然と丈夫にて、病苦の不幸も多からず、其身も丈夫となりぬべし。

○勤儉貯蓄にあらざれは國富み兵强からす

今日戰後の急務と云ば、國民一致して、勤儉貯蓄の其上に、農商工業を盛にするの外はなかるべし、國を富まして兵を强く、倍々奮發するに非れば、折角艱難困苦して攻め取し、其土地を取り返へされたる其上に、いかなる目に逢ふとても、手出しも口出しも出來ぬと云ふ、殘念なる境界に至るべし、禍は、已に生べし、呉々油斷すべき時に非ず、敵は眼前にあり。

○貯金は冗費を省き有益の事に用ゆる目的なり

○利倍増加の計算 貯金少しづゝにても預け置けば利に利の重なりて左の如く大なる覚金とをる

利	預け方	初年には	三年には	五年には	七年には	十年には	十五年には	二十年には
五分四毛の利	毎月三十錢つゝ預ければ	金三圓六拾七錢六厘	金拾一圓五拾九錢八厘	金二十圓三十四錢八厘	金三十圓一錢	金四十六圓四十三錢八厘	金七十九圓九十錢五厘	金百廿二圓八十二錢五厘
	毎月壹圓つゝ預ければ	金拾二圓二拾七錢七厘	金三拾八圓六十九錢壹厘	金六拾七圓八十三錢六厘	金百圓二錢二厘	金百五十四圓七十四錢五厘	金二百六十六圓五壹厘	金四百拾圓四十一錢八厘
五分六厘四毛	毎月三十錢つゝ預ければ	三圓九拾八錢五厘	拾一圓六拾九錢四厘	拾八圓〇〇七厘	二拾七圓六拾九錢九厘	四拾四圓四拾二錢二厘	八拾圓四拾四錢五厘	百二十六圓八拾八錢一厘
	毎月一圓つゝ預ければ	拾二圓二十四錢	三拾九圓〇三錢	七拾圓九十錢	百四圓二十二錢四厘	百六拾四圓七拾一錢六厘	二百八拾四圓四拾九錢貳厘	四百三拾九圓四拾一錢八厘

預金人員

廿八年十一月末日 現在貯金高百八萬九千二百四十圓三十九錢五厘
廿七年十一月末日 現在貯金高六十五萬四千四百二十一圓五十八錢
差引 四十三萬四千八百十八圓八十一錢五厘を增せり
廿八年十一月末日 現在の預け人の數四萬二百廿三人
廿七年十一月末日 現在の預け人の數二萬二千五百廿三人
差引 一萬七千七百人を增せり

人員區別

區	人員	區	人員
日本橋區	一万千四百〇二人	本郷區	七百五十二人
京橋區	五千五百〇九人	四谷區	五百三十八人
淺草區	五千二百三十三人	牛込區	四百四十一人
神田區	二千九百七十八人	麻布區	二百八十九人
芝區	三百二十三人	赤阪區	二百五十九人
本所區	二千〇三十四人	小石川區	三百六十五人
深川區	千五百十六人	近郡	八百二十七人
下谷區	千三百七十一人	他府縣	五百二十一人
麹町區	七百八十人	横濱市	五千百八十六人

各國貯金の比較

	金高	人員	調年度
日本	二六、五六九、三三四円	一、〇八五、三五〇	廿七年六月末
英國	七四九、五五八、〇六一	五、七四八、二〇九	廿六年末
佛蘭西	二二五、一三七、五七〇	二、〇九五、六二二	廿六年末
伊太利	一二三、五八六、六五八	二、三一二、三二三	廿四年
白耳義	一二〇、五二四、二七〇	七三一、〇五七	廿三年

金を殘すと云ふ事は、物をも食はず物も見ず、衣服其外論もなく、世間の義理も何のその、唯だ一筋に金のみと、吝嗇一途の事なりと、思ひ誤る人あれど、貯金の其主意は、永き月日の其内に、無用の費へを省きつゝ、日々多少の注意より、蓄へ積みし其金にて、世間の義理、衣服飲食家藏より、其身の快樂に至るまで、總て世の中に、有るとあらゆる事に用ゆるためにて、死に金を使ぬにあり。

觀潮

（八）晩婚（將來社會問題の一）

觀潮庵

晩婚を論ずるものに二種あり、一は人口の增殖を防ぐが爲めに晩婚を可とするものと、他は社會問題の一として其弊を論ずるものと、是れなり、前者は人口論より來りて、

第一　妻子を養ふに足るべき生計の見込あるものに限り婚姻を許すと

第二　婚姻税を課して婚姻を容易ならしめざると

第三　男女婚姻の年齡を高く定むると

等を法律によりて決行せんとす、而かも法律を以ては到底爲し得ざるものとするは通論なり、而して右三者共に晩婚を奬勵するものなり、其第一は假令法律によりて定められざるも今日は其傾向あるを容易に認め得べし、其第二は頃日政府より出せる戸籍登錄稅法の如き、其趣旨に於て異なるものあれども、稍似たるものなり、差異は唯一方に於て增稅の點より來り、他は人口縮減の策より來れるなり、增稅の考案より出てたる戸籍登錄稅は、一般に反對を受け課稅すべきものに非すとの論多數を占めつゝあり、但し人口縮減の點より他日如何に成行くや豫想し難し。其第三は全然晩婚を奬勵するものなり、斯の如く晩婚を强ゆるのことは、人口增殖して必すや非常なる慘狀を呈せんとの恐怖心より、止むを得すして策するものにて、其外に他の理由あるにあらず、

然らば晩婚の弊如何と問ふに、是れ既に定論あることにして、生理上、道德上、社會上より疾く論究せられしものあり。頃日『大陽』紙上に金井延君が「將來の社會問題」と云ふ論文を載せ、晩婚の弊を論せしものあり、其要に云く

一、少壯婦人の間に神經病及び之に類似する疾病の增加する傾向、此疾病に罹るもの近來漸く增加し、特に二十五歲以上の婦人に限る、是れ晩婚即ち適當の年齡に結婚することの減少せるが其主因ならん、二、兒子敎育の不完全、父は四十歲にして母は三十歲にして結婚したりとせば、其兒子、幼童の域を過きて後は心力衰へて之を監督すること能はざるに至り、兩親の受けし敎育は兒子養成時と大差異あるの今日、兒子の監督などは思ひも寄らざることなり、兒子が親に說明する如きこともありと親子間の意思の交通を破る如きことに至りては法外のことと云ふべし、三、家族的結合の不親密且つ不堅固なること、多年放逸の習慣を養ひ且つ獨身にて通ほせし男子四十歲にして神經過敏なる妻を持つとせんか、家庭は決して暖なるべき筈なし云々

又一般に論せらるゝ說は、適當の年齡に於て婚姻するもの少なきより、娼婦を增し私婚の惡風を大ならしむと云ふこと、及び生理上の關係より人口を減少するとの二なり。臺灣の如く金錢を以て婦人を娶る如き風の存する所には、下等貧窮社會に晩婚多く從て密賣の或一部に隆なるは止むを得ざる結果と云ふべし、

金井君の所說の如き弊害も、現に吾人の目睹し得る所のものなり、而して金錢其他の關係より四十前後の男子が十八九歲より二十一二歲の婦人を娶る如き、婦人の爲め家庭の爲め好ましからぬものなり、此には家族的結合の不親密を見ると同時に、少壯年の寡婦を多からしむるものにして、婦人の爲めに氣の毒なることなり然れども今日の傾向より察すれば、四十

前後の男子が二十歳前後の婦人を娶ること漸々増殖するが如し、人或は之を以て兒子の教育上、若き母親の監督に屬するが爲め、多少の利あるが如く思惟するものあれども、家庭の教育は、兩親同年齡位のものゝ共に生存して教育するに若くものなきを知らざるに坐するなり、

又近頃、適當の年齡に於て婚姻せざりし婦人が、往々にして飢えたるものゝ食を擇ばざるが如く、期に後れたるを口實として猥りに緣を求めんとし、未だ其配人を深く知らず、婚姻後痛く悔ゆるものあり、是れ何時もながらの出來事なれども、苟も教育を受けて、少しく道理を辨へたらんもの、豈に飢餓者の食を求むるが如き輕忽の舉動ありて可ならんや、婦人の晩婚者は男子より一層深刻に配を求るを常とするものなり、此弱點につけ入りて無暗に媒介を試み、他日の不幸を見せしむるは慘酷ならずや、晩婚に際あるは明けし、晩婚者が飢えて食を擇ばざるの弊亦甚だし、愼まざるべからず、

(九) 犯罪及び囚人に就て

近來宗教界に於ては、社會的傾向といふ文字、社會的事業と

いふ事に稍注目し來りしものから、監獄教誨、犯罪、囚人の消息等を報ずるもの散見す、『佛教』には「囚人の消息」と題して、先づ「嗚呼甚哉佛者の社會事業に冷淡にして實際問題を研究するの人に乏しきや、殊に監獄事業に於て最も其然るを見る」と叫び、様々の囚人の書信を掲げ、監獄教誨が教家の注意すべきことを說き。『反省雜誌』には「別天地の消息」と題して、六十三犯の老媼の話、犯罪の研究の必要、犯罪の宗原因、賣淫とアブサント、など報じ、『基督教新聞』にも亦「犯罪概論」あり、第一として犯罪の増加する次第を述べたり。其他、宗教上の雜誌に這般の文字漸く多く成り來れり。而かも大槪初心のものにして、尙ほ珍らしさうに書き綴るまでなり、犯罪學的監獄學的の研究を爲し、同時に此問題に熱中して、犯罪人を矯正し、監獄の改良を企つる如き言論は、聊かだも認むると能はざるなり。少しく注意され來りしと見ば可ならん。

(十) 所謂流行

所謂流行なるものは、余輩生平最も好まざる所、流行といふ

所には必ず反抗せんずる心地なくんばあらず蓋し流行ほど輕忽なるものはなし、『六合雜誌』記者說を爲して曰く、

流行には模倣心に一種の盲信の加はりたるを要す、而してその盲信と模倣との目的とする所は專ら見えにあり、他人に見らるれば足れり、この故に流行は變り易き表面的の事柄にあるを常とす、世に所謂文學界又は宗教界の潮流若しくは傾向なるもの丶多くは一種の流行に過ぎざるなきかを疑ふ、文學界の潮流といふもの亦是れ多くは一歲を出てすして變化す、衣服はき物の流行よりも短し、焉ぞ厭世に赴かは大厭世を以て貫かさる、破壞を事させは大破壞に進まざる、輕進は流行の中に求むべく猛進は求むべからざる也宗教幷に文學の變遷は一種の流行的變遷に過ぎざるか、

近頃心地よき文字かな、改良文字論と云へば直樣に文字論をなし、戲曲論と云へば直樣之に附和す、近頃の思潮又は傾向、流行と呼ぶもの、大凡一二ヶ月の生命あるものにて一泡沫にも似たり、轉輾反覆昨是今非、輕躁盲動眞個に厭忌するに堪えたり、英雄豪傑は馬鹿の如し、徒らに雷同附和するとなければなり、自信を強くし超然として世表に立つを要す、何々の流行何々の時代、何々の傾向といふとは、眞に一小部の輕躁に過ぎざるものと認めて可なり、須らく執着心を強くし自重の念を大にし、少しく保守的性あるを要す、

（十一）婚姻及び葬儀の費用

今や晩婚の弊を叫ぶものあり、厚葬の排斥を呼ぶものあり、晩婚や生計の困難、與りて力あり、厚葬排斥や亦同じ、近刊の『統計集誌』に篠崎亮君が、群馬栃木靜岡の三縣に就て、人民の生計及婚姻葬儀に關する費用の年次統計表あり、先づ其要を摘せんに

群馬にては、明治元年の頃、婚姻費は上等にて二百圓の所明治二十六年には五百圓に上り、下等にて二十圓の所、五十圓に上れり、

栃木にては、明治元年より同五年に至る頃、上等にて百五十六圓三十八錢の所、廿六年頃は二百三十四圓三十八錢に上り、中等にて八十六圓五十錢の所、百十二圓六十三錢となり、下等にて十九圓二十五錢の所、二十六圓三十八錢に上れり

靜岡縣にては、明治元年頃と同廿五年頃とは大差なく、十年十五年頃に於て大に費用を增したるものあり

又葬儀の費用に就て之を見るに、

群馬にて明治元年の頃、上等八十圓の所、廿六年頃二百圓に上り、下等七圓の所、十五圓に上れり、

栃木にて上等百二十二圓八十八錢の所、百四十九圓に上り中等六十三圓八十八錢の所七十圓三十八錢となり、下等拾二圓十三錢の所、十三圓二十五錢となれり

靜岡縣にては、明治元年頃上等百圓の所、二十五年頃も同じく百圓、中等は三

十五圓にて、廿五年頃亦同上、下等五圓にて亦同上費用の上りしは十年、十五年の頃なり

斯の如き統計は縣々によりて差異あり、各々特別の事情、金融の都合又は、風習の變遷等によることなれば、全國のを集覽して後ち、更らに研覈考究するに非ずんば容易には論議すべからさるものなり、唯右の表に就て考案する時は、漸次に費用の増加し來りしことを認むべし、生計の費用も平均して非常の増加をなしつゝあるなり、總躰よりして這般費用の増加は、社會の進歩を表はすものにて、素より悅ぶべき現象なり、唯心すべきは、所謂虛禮虛式の流行等につれて、徒らに盛大を裝ふが如きことのなからんことなり、費用増加すれば供給收入も亦大なるを要す、一般の風習が徒らに奢侈に流れ、一習風をなして費用を止むを得ずに増加するの現象を呈せば、洵に憂ふべきことと認めざるを得ず、晩婚は生計に婚姻費に至大の高價を要する時に於て多數となる、此等多數となるに從ひ、淫風公行し密賣淫流行するなり、又葬儀費の爲めに財産を皆無とする如きもの往々有之と云ふ、是れ儀式と一種の風習に捲込まれしものにて、賞すべきことにあら……、

（十二）早稻田文學の雜界

『早稻田文學』彙報欄に「雜界」と名つけ、風俗、人情、流行等を記述するものあり、余輩は一個の友人を得たるの心地なくんばあらず、既に記述したる所は、風俗の大變動、無禮講時代、隨意採擇的風俗、繪草紙店、寄席、遊戲（第二號）あり、第三號は肉躰上の悅樂、精神的悅樂、一般の氣風、今の所謂社會小說、女義太夫の流行、藝人の種類と員數を叙し、第四號は近時の話語を叙したるものにて、令孃細君紳士小兒の言葉を記して面白し。其中の一二を爰に抄錄すべし「一般の氣風」を叙する中に云ふ

吾人は今の諸家庭を觀察する毎に自我的氣風の充滿に驚く、明治の今日は「我」を以て特質とす、エゴイシチックは其の「我」の美しく顯れたる時の稱にして、セルフヒツシユは其の「我」の穢く現はれたる當時の稱也、上中下おしなべて主我的なるは一般の氣風なり、さ

又た「近時の話語」を觀察したる中に云ふ

近年に至り最も著きは漢語いさ廣く波及ろせとなり、中流以上の男子は勿論、學生、女學生は言ふに及ばす、學校出に非る令孃、妻君も「精神的」「器械的」ぐらゐの意味は耳學問に聞覺えて、日常の談話に此等の言葉を聞くこと珍らしからす、所謂政治家の夫人などの一寸の應答狀にも全く男の手紙と相違なき自筆あり、華族社會の貴婦人の書面はた多くは是れなり、又た昔は牛込邊の端末の

語たりし「アラよくつてよ」などが今日にては寧ろ中流以上の娘言葉のやうに聞かるゝも異なものかな云々

其他色々の觀察あり、かの風俗、好尚、言葉、流行の觀察をして廣く偏く深く爲さんとは、民俗學上、至大の益あり、唯希くは一小部の觀察に僻せざらんことを—、

(十三)　婦人問題

征清の役起りて、兵卒軍夫は素より政治家新聞記者の徒、廣島を中心として爰に集合せり、之が爲め同地には千八百餘人の私生児を出せるとは、各新聞紙上に見えたり、其筋にて調査統計したるもの千八百人なりと雖も、斯の如き統計は、各自の私德に關するものなるが爲め、平常すら三分の一の外は知れざるものとす、されば實際の所、五千餘人位の私生児ありしならんと想像するも妨けなからん。

又た、政治家、代言人など稱せられ世に名を爲す人々の内幕を見聞するに、强姦姦通、有夫姦、藝娼妓狂ひ等、珍らしきことにあらざるが如し

又た、離縁の增加せると近來著しきものあり、

又た、或は築工事業の爲め、幾多の職工雇夫の集まる所、兵卒の所在地、等歴々として風紀亂るゝを常とす—、

斯の如きは、止むを得ざるものとすれば止むを得ざるものあらん、而かも止むを得ざるといふとは强辯に過ぎずして、經世家は心を用ゆべきことなり、吾人は右の如き事實に對しては

第一　婦人の貞操に欠くること

第二　婦人の位地の低くきこと

第三　婦人の愚昧なること

に驚かざるを得ず、素と是れ婦人をのみ責むべからず、責は男子にあること明かなれども、亦た婦人にも歸せざるを得ざるものあり。

廣島に於ける場合の如き、金錢の爲めに誑かされ、終に彼の結果を來せしもの、云はゞ通り客にして、而かも生命旦夕を計られずとする男子なり、金錢は平常に比して豐かなり、以て飲むべく以て遊ぶべし、通常の婦人が金錢に誑かされて、一時藝娼妓の姿と化せしもの多き、實に悲むべし、即ち是れ賣淫の結果なり。多數の職工工夫の集合する所、又は兵卒の所在地に於て、風紀を壞亂するも亦同一なり、某川、某礦山等に多數人集合すれば、同地方の子女群を爲して之に赴くなり、

婦人の位地低きか爲めに、多少の關係より直ちに、籠中のものとなり之に甘んず、愚昧なるが爲めに恬として耻ぢず、婦人の貞操の性に欠くるほど、悲むべく、痛むべく憐れむべ

き事なし。想ふに將來社會問題の一として、

如何にして貞操に富ましむべきか、婦人の位地を高むるの方策如何

の問題起らざるを得ざるべし、女子敎育上に於ては、樣々の計畫あるべし、而かも結局は智識又は見識といふものよりは寧ろ一種侵すへからざる威嚴、氣力（例之徳川時代士族の娘の風）を養成すると肝要なり、（婦人問題全躰に就ては他日詳論すべし、爰には近時の狀況を敍したるのみ）

（十四）歐洲諸國の人口減少

人口の増減は社會學上、注目すべき一現象なり、而して其減少するの原因は、或は他國に移住するより例へば獨逸人の米國に移住する如き或は、風俗亂れて胎內に於て未だ成形せざるに先たち一種の藥品もて胎兒を消滅せしむる如きあり、一般の定說にては文明開化の進むに從ひ、敎育の度益開發し、腦髓の機關發達して斯に勢力の過半を費すが爲めに、再生力を減ぜしむるものありとも云ふ、今歐洲諸國に於けるものは、果して那邊に因するやは、未だ詳にせずと雖も、左表により て之を見れば既往二十五年間に於て常に減少したるの事實は明かなり、且らく記して他日の資料となす。

千人に對する出產者の數	千八百七十六年	千八百九十三年	減少
聯合王國	三四・八	三〇・八	四・〇
英蘭及威爾斯	三六・三	三〇・八	五・五
蘇格蘭	三五・〇	三一・〇	四・〇
愛蘭	二六・四	二三・〇	三・四
伊太利	三九・二	三六・六	二・六
瑞典	三〇・八	二七・〇	三・八
澳地利	四〇・〇	三六・二	三・八
匈牙利	四五・八	四二・五	三・三
白耳義	三三・二	二九・五	三・七
瑞西	三二・八	二八・五	四・三
和蘭	三七・一	三三・八	三・三
獨逸	四〇・九	三六・七	四・二

（十五）支那の乞丐兒

朝鮮人某、始めて我邦に渡來して先つ一驚を喫したるは、我邦乞丐の何んとなく容姿よく、三味を彈き歌をうたひ、嬉れし和なるとなり、と物語れり、是れ或一種の上等乞丐兒を觀たるに止まれども、概して朝鮮支那のに比すれば風俗を異にするものあるは見易き事實なり、我邦乞丐兒の何んとなく樣子よく、歌ひ舞ふの狀あるは、天然の風景を愛する一般の氣

風に化さるゝものもあらん、又經濟上貧富懸隔の極度に達せざるが爲めにもあらん、諺に三日乞丐兒すれば忘られじと云ふ、恰も一旦官吏となりしものは、其味忘られじと云ふに均し。支那は國家の實なき國にて、通性を欠くが故に一大社會集合なり、我邦は國家としての統制整ひ、愛國心強く、慈善心深し、支那は愛國心を有する人民に乏しく、經濟上は利己主義の組織を有す、總躰よりして支那社會の生理は、神經遲鈍なり、大男の總身に智慧のまわり兼ぬると同じ、されば暖かさよりは熱烈、そよふく風よりは冷酷なるもの、漸やく感覺を與ふるものなり、我邦人は然らず槪して溫和の質あり、春風駘蕩の觀あり、慘忍酷薄醜穢を嫌ふ、乞丐兒も亦此風に化さるゝもの、試みに左の支那乞丐兒談を讀め、若し之をして我邦にあらしめんか、子女戶を閉して怖ち恐れんなり、而かも或場合に於ては稍似たるものもなきにあらず。

夔州府は四川省に屬し宜昌より重慶に至る間の繁華市場なり今同府を過りて風俗を觀察したりし人の話を聞に同府に入りて殊に際立ちて人の注意を促すものは豚肉店と乞丐兒なり豚肉店の多きは船舶の輻輳なるが爲め其需用多きに依ると雖も乞丐兒の多きに至つては其理由を知らず彼等の中にも種々の階級ありて身に一張の襤褸を纏ひ風をひれりつゝ憐みを請ふは上なり一枚の破蓙を被り冬天の寒氣にブルブル震ひ蚊の鳴く如き聲して往來の人に付き纏ふは中なり下の下に至りては纔かに腰間片布を蔽ひ道路の片隅泥濘の間に眠むるともなく死するともなく氣息掩々たるあり此等は實に阿片を喫して有ゆる物件を蕩盡し最早や人の慈悲を受くるの勇氣すらなき輩なり更に彼等の擧動を見るに掃溜に入りては豚犬と餌食を爭ひ料理屋の竈の下には猫と位置の取合をなして烟筒の間火落の下に首を差込み中には僅かに溫を留むる灰燼を掻き集めて其中に蹲踞するものあり全く人類の範圍を脫し憐れと云はんか馬鹿らしと云はんか名くるに言葉なし又た彼等の店頭に立つて錢食を乞ふ樣を見るに全く我邦と其手段を異にせり彼等は憐れと見える丈憐れなる姿を粧ふに非ずして嫌がられる丈嫌がられ度きなり其店に來る華客をして鳥渡躊躇せしむる迄に嫌がられ店者をして早く與ふるものを與へて立ち去らしめよと言はん許りの風をなすなり故に彼等は種々の奇怪なる風を粧ひ或は小蛇を捕へて之を呑み鼻孔より其首を出さしめ或は額に生疵を作りて鮮血を流がし猶ほ之に飽足らで火箸を以て兩脣を縫付け或は身躰の癩病疥癬瘡毒等にて不具となり居るを幸ひ尙ほ其醜汚ならざらんことを恐れて眼瞼に竹片を挾み赤んべいを爲し强て惡相を粧ひ其店頭に立つや大聲疾呼して喧騷を極むるなんど狼藉限りなしと云ふ

（讀賣新聞）

（十六）厚葬排斥と墳墓廢止

『日本宗敎』第七號は、「厚葬排斥の聲」と題して、一は唯物論より論推して、靈魂といふもの身躰と共に滅するものなれば死後に於て厚葬するの無用なるを說ける津田眞道氏の薄葬說と、他は葬禮の眞意義を忘却して、徒らに虛禮虛式をなし、

財産を蕩盡する如き弊あれば、厚葬を戒めよとの渡邊某の說を擧けたり。之と共に東京經濟雜誌（二月十五日刊）に石川安次郎氏の墳墓廢止論出てたり、共に近頃の奇聲として爰に抄せん、

墳墓を廢止すれば第一、土地を利用し且つ節儉し得、第二石材を利用且つ節儉し得、第三竹其他の者を節儉し得るなり、其他線香、桶、杓、花等の浪費を防くべし、墳墓の將來の運命は如何と云ふに、必す終に墳墓に入るべき者なるを思ふ、自然に人生に疎んせられ遂に廢止せらるべきを見るなり、宗教家と科學者是れ思想界の支配者なり、而して兩者共に明に將來に於て墳墓廢止を唱道すべき運命に屬す墳墓廢止の議は必すしも卑見家の口より出ですして實際に行はるべきなり、

又墳墓廢止の方法は、「日本臣民たる者は爾今以後墳墓を設くべからず」との法律を施行すべき也、死屍は之を燒場に捨つべし、人生素より泡沫夢幻、過去幾千万年此の如くにして來る、將來幾千万年亦此の如くにして往かん、或は「人生に大功勞を遺せし人に限り僅少の土地と石材を限りて墳墓を設くることを得るとなすべし」と唱道するか如きは余輩敢て甚たしく反對せさるべし、

唯其姑息なるを如何

隨分面白き說なり、將來必ずや斯の如き聲高きものあらん、墓地の代價益騰貴し、富者は大金を拋ちて廣地を買占め、貧者は僅かに一尺四方の地に一小柱を建つるは、現時府下の墓地に於て之を見る、さりとて右の如きは餘り先見過きて實行は容易に期し難し、寧ろ姑息といふものの、實行を急くに若かざるべし、廢止の利益を說いて土地石材竹等を節儉し得るとは、上中社會の今日の人士をして服せしめ難からん。余輩は餘りに遠くして、昨今にては到底行ひ得さる如き說を好まず、寧ろ最緊要の策として

一、死屍は悉く火葬ならしむる事、二、一定の年限を定め之を越えたる墳墓は悉く破壞する事三、石塔は段層を高くし其中に骨を入るゝに足るの箱を造り子孫の骨を入るべき築造を爲すと（國家に大功勞ある者に限り）、四、一墳墓には二尺四方外の土地を賣買せざる事

を行ふに至らしめば如何、暹羅の如く全國中一の墳墓なく、死したるものは之を燒きて骨をも顧みずと云ふが如きを理想とするは酷ならずや、如今、一方には日曜墓參論すら唱ふるあり、一方には全國一の墳墓を見ざらしめんとの說あり、兩極端には眞理なし、要するに制限を加へて墳墓の地をして愈廣く大ならしめざらんとを期すべきのみ。墳墓廢止の說は、我民俗の精神には適はざるふしありと評すべし、蓋し余は保守主義より立論するにはあらず、斯の如きは社會精神を一變して後ち行ふを得ん、習慣は一の道德なり、世は唯物的にのみ觀すべからざるものあるなり、低所なくんは高所なし、谿谷なくば山岳もなし、無益と思はるゝものも悉く無益なるにはあらず、唯改善の方に就くべきのみ。

評論

波狀曲線論

有美堂主人

磁石の同名の極は、互に相反撥し、異名の極は互に相吸引す。人間の性情なるものも、亦或るものに對しては恰も異名の極に於けるが如く、しかく、執拗愛好の念盛んに勃興し、之を慕ひ之をもとむること、少年の處女を追ふより倘ほ甚しきものあるなり。然れども亦或るものに向つては、其一班を眼にし、之が名を耳にするのみにして、なほ且つ嘔吐を催すに至るてふ如くしかく嫌忌の情激烈なるものなり。曾て和田守菊次郎氏が、記憶法の講義を神田青年會館に聽く、氏が說く所によれば、人間の頭腦なるものは、凡て音樂的のものは、之を受け之をとゞめ以て記憶に存すと雖ども、音樂的ならざるもの——換言すれば亂雜にして調和と綜合とを欠けるの事物は、凡て之を排斥して腦裡に止むるを肯ぜず。隨て之を記憶することと頗る困難なりと。盖し誤なきの說といふべきか。

此くの如くにして人間の歡び迎へ、亦歡び迎へざるもの〻間に於て、人間の非常に歡迎し、常に之を見て悅び、之に接して快美の感を感受するもの〻一は確にこの波狀曲線〰〰なるべし。故に余輩は曰く、人間は波狀を愛好するものなりと。」

讀者の知る如く女學雜誌各欄の名稱は皆な此の波狀形の曲線によりて包圍せられあるなり。諸氏之を見るの際果して如何の感をか有する?、不快の感は天より來りて胸をつくか。將た亦快美の感の、一種いふべからざるもの、胸に起るあるか余輩は必ずや其の後者ならんとを信ずるものなり。余輩がなほ京都の學窓にあるの日、偶々鳳凰堂の模造がシカゴなる萬國博覽會に出品せらる〻と聞き、果して如何なる特優の其間にあるものなるかを知らんと欲し、一日特に步を宇治に枉げて之を見たることありしが、素よりその雙對形と釣合との巧に保たれ、大に見るべきものありたりしには相違なきも、殊更に余輩の眼を引けるは、其の庇が、所々に散在する多くの廣壯なる寺院社殿とや〻趣を異にし、波を打ち居りて波狀曲線の形をなせること乃ちこれなり。その此の如く庇に波

を打たせたるは、恐らく古人の業に既に波狀曲線なるもの丶人に快美の感を起さしめ、その性情の之を愛好するものたるを知得し居たるによるならんか、又人の龜井戶なる臥龍梅を賞して措く能はざる如き所因のものも焉ぞそのウチ〱として波狀曲線の態をなせるによらざるを得んや。人はたゞ眼に感知し得る波狀曲線を愛好するのみならず。亦耳によりても凡て波狀曲線的のものを愛好するものなり。我等の好んで耳にする樂譜の調べにしてもし少しの高低もその間にあるなく、單調なること恰も一直線の如くならば如何、我等の之を厭ひ之に耳を借さゞるや必せり、されば其の我等を樂ましめ我等を悅ばしむる所因のものは、全く變化のうちに均一あるが故なるべし。而して變化のうちに均一ありとは、換言すれば、波狀曲線的なりとのことなり。是に於てか余輩は以爲らく、和田守氏の所謂人間の頭腦なるものは凡て音樂的の事物を歡迎し、之を記臆に存するものなりとの氏が記臆法の大原理の如き、亦この人間は波狀曲線を愛好さるものなりとの假說によりて說明するを得べしと。又朗讀法に於て雄辯法に於て單調を忌み、亂れざる變化の欠くべからざるものたるは、これ又人間の波狀曲線を愛好するの念慮を滿足せしめんとするの意に外ならざるならん。又文章に於て抑揚の必用なるが如きも、人間の此性情あるの所因なりといふを得べし。

たゞに是れのみならず、人間の性質の如きにありても、人の愛慕を逞ふせんと欲せば、須らく波狀曲線的ならざるべからず。世に所謂面白き人物とは、これ乃ち波狀曲線的人物のゆゑにして、平凡普通の人物の如く平々坦々たるとなく、何處にか角立ちて、一種の特長あり又之に伴ふ欠點を把持するも、しかも亦その角は幾何學に所謂角の如く、銳きものに非ずして、何となく丸るき所あるの人なり。人間の性情は直線の如くスルリと發達し、可もなく不可もなく毒にもならず又藥にもならざるが如き人物よりは、寧ろ却て此種の人物を愛好するもの丶如し。人はたゞに此種の人物を愛好するのみならず、世は亦實に此等波狀曲線的の人物を要す。されば古人も亦歌て曰ひけらく、『圓くとも、一ト角あれや人ごゝろ、餘り圓きは、ころびやすきぞ』と。余輩を以て之を見るに此の歌に、圓くとも角あれとは是れ乃ち波狀曲線的たれとの意に

外ならざるものゝ如し。世に波状曲線を除いて圓くして角あるもの果してこれあるや否や。

此の如くにして觀じ來れば、波状曲線は人間の性情の頗る愛好する所にして、之に快美の感を起さしむるの力あるものゝ如し。その何故に魔力を有し、人間の愛好すること此の如きに至るやの理由に關しては、余輩些か説なきに非ずと雖ども、先づ茲に暫く筆を擱かん。

春夜漫錄

秀野生

（一）よしなし言

春とはいへど、風なほ寒し、獨居の夜の燈、さびしげなる光を机上の書冊の面に落して、かきおこす埋火も何時しか消えつ殘れるは豆の如き一點紅のみ、思ふにもあらず、思はぬにもあらず、うつら〳〵と過來しかたを想へば、あるはまざ〳〵しく、あるはおぼろげに夢より夢を辿るにも似たり、思はむも益なし、たゞ手にふるゝものゝ本繙きて、たのしめる道にこの思を絶たむかな、それと定めぬ文の林にわけ入れば、こゝにもよしなき感はうかびつ、影を追ひ形にあくがれて、よしなきこと、そこはかとなく書いつらねむ、これもよしなしや、

（二）近頃文壇の通言葉

評論家は憂ひて云ひけらく、文壇近ごろ一種の狂想あり、不健全なる思潮のおもかげ浮びて、世を毒し人を陷るゝありと、一應は道理ある言葉とも聞くべし、されど、こはあまりに杞憂に過ぐるの觀なきか、一二文士の濁世を憤りてか、醜骸を塵に委して、散る花とともに、もろくも消えたるなど、狂想の餘波と一概にいはむは、あながちにとがむべからずとするも、不健全なる思潮漲りぬなど論はむは未たしと思ふ、うるはしき春の花にあくがれて、冴たる秋の月に負くは心なき業なり、暗淡たる世の半面をのみ觀るの、不健全なるは、さながら光明なる半面をのみ觀るの不健全なるが如し、思ふに今の文界には不健全を憂ふるほどの狂想欠けたりと思ほじ、否らず、眞にかなしみ、眞に泣くの涙尠しと思ぼし、これやがて熱情のいと淺々しきを表すものにはあらぬか、こ

の情熱欠けたるによりて、熱罵もなきにあらぬか、憤怒の相と見ると稀れなるにあらぬか、せきあへぬ涙、おさへがたき悲なきとともに、同情の念に乏しく、激越の調に乏しく、而して圓滿なる快樂和平の趣味なき所以にあらざるか、

ある人は深刻の想ほの見ゆと噂す、社會の罪を罵りてか、より〳〵世の秘奥をあばき、さらぬは人の心の底を貫かむとする青年文家の心がまへ、おさ〳〵進歩の萠しをあらはし、僊移せる風潮のほども知らるれど、深刻などいはむは、あまりに穿ち過ぎたりと思はるゝを如何

陰森の鬼氣ありと見ゆるは、陰森の鬼氣あらしめむとする作者の底意あからさま、怒罵の言ありと見ゆるもたゞ、怒相あらしむ罵聲を高からしむとする用意ほの見ゆ、眞に悲しみあり、眞に憤あり、情熱内に激して制すべからず、筆尖血あり涙あり、以て深刻といはむのみ、影を看、形を看て、かれこれいはむは輕ろ〳〵しとのそしりなくむばあらず、

要するに文界の近時の推移は著しく、文士の用意もいと嚴にして、かゝる傾向無きにしもあらじと思はれど、深刻を以て許せむは未だし也、

われらは寧ろ狂想の欠けたるを見る、情熱の欠けるたるを思ふ、不健全なりと論はむほどの思想の狂驗なるを見る能はず、深刻なりと論はむほどの眞趣を求むる能はざるを憾みとする也、

《三》文壇の女性

博文館より出でたる閨秀小說は、少くとも明治文壇に如何なる女性作家を有するかを、世に說明するの價値ありき、これを痛快に罵るものも、なほ、そのうち、優に有髯家林に對して、一地方をしむるの名手あるを是認したり、これを賞讃して、ひたすら歡迎の意を表したるは、そのうちには幼稚にして、あき足らぬも多けれどなほその才情の萠あらはるゝを愛撫して、後の春あらしめむとの業なりき、要するに何れが今の文界が双手をあげ、花たばを投じて、以て、女性作家を迎ふるの心をあらはさゞるはなし、

女性の詩人として名あるもの古來幾何ありや、將た、時人として如何に成功するかのとは、さて措き、その一双の涙もろき明眸に映ずる影は、いかに特異の趣あるか、如何に優妙の姿あるかは人々の女性作家を今の世に渴望する所以なるべし

女性は悉く同情に富めりとにはあらざるも多くは同情に富めるなり、女性は悉く涙もろしとにはあらざるも多くは涙もろきなり、温々たる情、烈々たる熱、やさしき風情、感じ易き性こまやかなる意氣は女性の本領なり、この特性をもて有髯文壇のかたへに、一双の彩花を添へむは、われ人の希ふところにして、また自ら其期するところなるべし、

女性もまた世に憤るところあり、こゝに於てか時に罵るとあらむ、女性もまた世に怒るところあり、こゝに於て時に嘲るとあらむ、圓滿ならざる世、誰か不平なからむ、混亂せる人事、紛擾せる社會、仰で天を見れば時に冷絶悲絶の雲横はれり、伏して地を見れば時に濁浪溢り黒暗々のおもかげあり、同情やる瀬無うして、紅涙千行下る、而もその極みには冷罵もあるべし、激調も起らむ、女性豈獨然らざるを得や、去れど、おしなべていはむには女性の紅唇には冷罵は相應しからじ、霞の如き眉には憤怒の相をゆるさじ、温々たる春の波うつ胷の裡には、慷慨激越の調を皷動せしめむよりは、幽遠にして悲の致こそあるべきなれ、秋の夜の空物凄きまでに澄みわたりて、氷の如き三日の月の冴へ〳〵としたる風情よりも、わか草萠え出でたる畔をそゞろ歩て、ちよろ〳〵と流る春の水に、花瓣の一ひら二ひら浮びたらむこそ、みの本來の面目ならめ、これならねば惡しゝといふにはあらず、たゞかくあらむとを女性に望むといふのみ、醜きあたりに憤らむよりは、たゞ美しきかなたに行け、暗黒なる一面には、しばし眼をとぢて、更に光明なる一面に遊べ、世を罵らむより先づ同情の涙を濺げ、起つて抗争せむよりは寧ろさしうつむきて、ゆたかに胷をしづめよ、閑寂の境にさまよふよりは、優美の巷に寛歩せよ、玉の如き蜜の如き春風を扇つてこの枯槁したる世を活かしめよ、これわが文壇女性作家に待つところある所以なりと知らずや、

(四)風流放語

われ嘗て人と與に風流を語る、語つて激するところのものあり、風流放語を草す、一條の激語なりといへども、こゝに掲げて、自ら讀み自ら笑はむかな、いはく

風流とは何ぞや、必ずしも圓顱緇衣、白眼、世を觀、冷笑、世を厭ひ獨り草庵に穩逸するの謂にはあらじ、又固より圍碁、骨牌、茶湯、活花の末技に熱して悠々閑々として脫塵超俗の姿を

粧ふの謂にはあらじ、風流の語久しひかな、而も其眞精神を解得したるもの果して幾何かある、自ら風流を以て任ずる假装家は、嘗て横行濶歩したりき、今も猶ほ之れ無きにはあらざるべし、風流の語を耳にするや則ち閑飮徒食の遊戯視して唾棄せむまでに忌み、仇敵の如く罵りたる輩は古より多かりき、今も猶ほ多かりなむ、嗚呼彼も偏せり、此も僻せり、」一椀の茶、一首の詠、一壺の酒、人生に於て何かあらむ、花咲けば美しといひ、月明なればいと淸しと眺め、秋の野にさまよひ、雪の夜にさすらひ、以て自ら得たりとなす、噫、花月何を以て美しき、逍遙果して何の得るところぞ、若し之れ是を弄び是に遊びて自ら風流を以て任ず、世如何てか斯る徒手遊眠の輩を寛假するに堪へむ、世を厭ひ塵を避くるといふ、終に世のすねものゝ徒事ならむのみ、勤勉勞役は人の天職なり、禮義秩序は道德の要義なり、これを無みして、以つて放縱跳梁するの輩に至つては、是豈に人類の公敵、社會の鼠賊にあらずや、風流果して斯くの如くむば、吾人は一日一刻も其存在を許容すべき理由なきなり、然ども是豈に風流の眞面目ならむや、風流由來世にあやまらる、嘆ずべきかな、

想ひ、思へ、風流とは斯の如く道義と相反目し、倫理と相隔離する者にあらざるを、頭上、脚下、目前、背後、其軆觸るべく、其音聽くべく、其姿視るべし、如何んぞ是を春野に求め。秋夜に求めむ、況むやこれを茶湯活花發句朗詠の末に求むるとをかなさむ、

風流とは何ぞや、これを釋せむとすれば、千言万語、猶ほ飽き足らじ、然も終に誰か能く其眞味を言説し得るものぞ、哲學者は宇宙を解躰せむとし、詩人は宇宙を歌はむとし、豫言者は、いと高き威力を此世に傳へむとす、渠等は三人の兄弟なりといふにあらずや、其是を歌ふは其秘奥を感得すればなり、是を感得し是を謳歌するは、調和の境を得るの道途なり、天地の美妙を直覺して、以て其美妙に浴す、茲に於てか人と宇宙と自在にして圓轉滑脫す、何處にか衝突の影あらむ何處にか離反の姿あらむ、宇宙則ち我、我則ち宇宙、星の流に棹して月宮に遊はむかな、人若し斯の至美の境に逹せなむか、社會を離れ、人類を離れ、天を離れ、地を離れ、吾心萬象を吐呑して餘すところなく、花咲くにまかせ、水流るゝにまかせ、一片の靈火皎として千古に輝き、永劫を照らす、

斯に於て那邊に撞突の相あらむ、何となればわが心自在にして、鳥の空に翔けるが如く、求むべからざるなく、得べからざるなく、能はざるなければなり、

胸底一片の火焰を扇つて、塵を燒き、垢を燒き、以て天然を視よ嫉妬なく、怨恨なく、遺憾なく、憎惡なく、淸高玲瓏、優美壯麗耳に天籟を聽き、眼に妙光を視、覺の極み、悟の極み、感の極み、是れ豈に風流の極みにあらずや、

世は濁れるも吾は獨り淸めり、人は相鬪めぐるも何の刄か能く吾膚を斬らむ、我は白雲の裡に翺翔し、天樂を奏して天女と倶に舞はむ已、

理に於て得るにあらず、論に於て求むるにあらず、情熱則ち燒へ、感官頻に働く、腦底月の冴へたるが如く、胸裡花の香を薰するの時、神來の風流則ち我れに宿らむかな、

(五)愛らしき小兒よ

嘗てわが一人の友、愛らしき小兒を得たり、一箇の小兒に對すれば、理窟ずくめのわが友の何ぞ無邪氣となりて、小兒らしくなるや、世の人をして小兒らしからしむるものは、かの小兒なり、愛らしきかな、小兒、われその時に小兒を祝するの言葉なりけり、こゝに錄せむか、いはく

世に最も無邪氣にして可憐のものあらば、そは赤兒の顏にあらずや、世に最も無心にして可愛のものあらは、そは小兒の面影にあらずや、曇を帶びたる瑠璃色の眼、宛轉、微笑を湛ゆるの時、何の鬼か能く怒らむ、何の魔か能く狂ふとをか敢てせむ、血色細膚を透して紅、花の如く、双頰明珠に似て而も溫々として春あり、早蕨の如き双手を動して、空を弄ふの時、何處にか邪險獰惡汚穢を容るゝ餘地あらむ、

小兒のおもかげは粹の粹なり、美の美なり、斯るが故に世に親子の情ほど、至醇にして一點の塵なく、一點の垢なきはなかるべし、家庭の淚は云ふも更なり、濤怒り風吼ゆる浮世の面に一點の明光を點じて、嫉妬を拂ひ、怨恨を拭ひ、邪惡を淸め、憤怒を和らぐ、世に最も小やかにして、偉大なるは小兒なるべし、何となれば小兒は殆んど天の榮光を圓滿に具有するを以てなり、

なき人のむかしをともにしのびつゝ
春雨さびし燈火のかげ　(鵬)

雜録

我が心懐

杜鵑子

もし銅鏡明かなることよく心を寫すに足るものありて、予我心を以て、其前に立たんには、其あまりに醜きに愧ぢ、肉靈の戰、修羅に荒れて、嘗て殆ど寧時なきに震慄せん、甚しい哉、肉靈の我心裡に戰をなすや。肉か、靈か。いづれか我心の主たるものぞ。我なるもの、孰れにか歸すべきものぞ。一ツの心の外に我なるものあるべきに非ざれども、奇しきかな予には肉靈の戰塲に荒せる心の外に、なほ我なるものありて、擾亂やむなきを苦しむが如く、肉に苦しめらるゝ靈、靈に苦しめらるゝ肉、共に懊惱煩悶の苦叫を呻いて、其我なるもの、亦是が爲に苦楚を訴ふるが如し。戰いづれの日にか歇んで、肉靈平和を媾ずべき。靈の肉を殺すか、果又肉の靈を殺すに非ずんば、寧時遂に來らざるものか、吁、我心の苦痛いづれの日にか除かるべきものぞ。

基督は世に刄を出さんが爲に來れり。予の初めて基督に聽いてより、嗚呼幸か不幸か肉靈互に戰をやめざること、茲に五六星霜、如今の信仰と精神とは、寔に基督の心にかなへるものなるや、否やは未だ知り難しと雖も、近頃や、悟りを靈界に增すことあるが如くに感ずれば、他方に於ては、肉の念いよ〳〵力を添へて強く、常に之を制せんとして、制する傍より、恰も盜賊の夜來るが如くに、竊に念頭に犯し來りて、爲に修羅一慘を倍す。靈は切りに基督の友たらんことを欲して、肉は盛んに悪魔の奴たらんことを希ふ。予は二者孰れに與みするものぞ。予は基督につけるが如く、又悪魔につけるものゝ如し。暴露されたる心を觀る神は予を何とか思ふべき。肉情の勢を外に發洩する精神錯亂の時、もし予が上に來ることあらんには甚麼なるものぞ。其時には、靈界の力によりて、僅に抑壓せる肉情忽ち、勢を逞しうして、腐敗の溝壑に、我を沈落せしめて、やゝ淸きに似たりとして、予に信用を置けるの人々をして、世につけるものゝ穢きよりも、なほ穢きに驚きて嘲らしめん。肉は靈に勝んとし、靈又肉を敗んとして、共に苦しみをなす。此時もし靈の力、俄に激して、直ちに肉を制せんとせば、或は爲めに自から生命を現世に絕つことあ

らん。自殺の心理は如此き處に在るが如し。誠に肉の汚れを苦しみ、其間に平和なきものは、自殺するに若くなきを思はん。されど予の如きは、聊か世に生きるは事業をなさんとするの念あるが爲めなりと思へば、もし失望落膽し、精神錯亂するに非ずんば、かの幾多厭世家の轍を蹈むとなからん。肉を惡んで、之を棄てんとはおもへども、この肉を以て、なほ世に事を務むべきものなりとの念は、なほ予をして現世にあらしむ。然りといへども予や世に出で丶數奇坎坷、憂鬱多くして且病弱蒲柳の質殊に煢獨の苦を訴ふるものたれば、もし爰に慰を與へ、鬱を愈すものあるなくば、或は魯連を追ふの悲慘を演ずるとあらんか。煢獨は人を破り、同情なきは人を殺す。予の憂鬱煩悶も之に出でたるか、心裡修羅を現じて、案んずべき方を知らざるも、之が爲か。噫旻天に哭して求む。もし予なほ、此世に存ふべくんば、この堪へがたき、紛亂騷擾の心裏に平和の種を蒔くものを與へよ。寔に我心は平和なくして苦楚煩悶するものなり、噫夫。

一編舊稿に屬す、これを災餘の筐底に獲て、當年の心裡を追憶し、如今の胸懷奈何と顧みて、彼此相若と多く轉長嘆す。

斷腸の記

流　水　庵

あさましき塵の世うれひ
ふるふ手に涙をうけて
かきませしあはれこの文
かたみさは思はざりしを

おくつきにやすらひませば
しめやかに雨のみうらみ
さびしげに風のみはらふ
なか〳〵につらき君さへ

とりいでゝ文よみゆけば
秋風の聲のみきこゆ
やせませし姿のみ見ゆ
なか〳〵につよき君さへ

世にしまぬきよきこゝろは
香もふかき花ひらのせて
瀨にせかれ岩にくだけて
ゆく水のさまににたるか

花すみれにほへる蔭に
しばしだに歌ひもえせぬ
あはれこのまことの聲な
こゝろして世も人もきけ

松に啼く日暮しのさびしき聲にあこがれて、そゞろに彼の君戀ひしく、もの書いつゝる筆ををさめつ、耳うち傾けしはまこと昨日とのみ思ひたりしに、今日は早や萩の花の盛ぎはに散りぼひて、あはれなる世のうつりゆくさまに、秋風いたくも身にぞしむ。庭前の梧桐一葉二葉、聲なき秋の聲を聞きわけて、すら〳〵と永き夢に歸りつ、力なき蝶の睡りを驚かすなど、いとわびしげなる折柄、暮れゆく秋の日の、物干しの竿より短かくて、いつしかに夕影の色襲ひ來り、シンミリとしたる空合に、何處の山より何處の山に歸るにやあらん、二日の月の此のひまに隣りの榎の木の梢にかゝりて、夕風に吹きちぎらるゝばかり薄白く見ゆるに、一聲を殘して過ぎゆく歸鳥のさまなど、凡につけ秋は寂びしきものなるに、况して夕暮つかた、語らふ友もなく、獨り者思ふ憂の拂ひ難く、故鄕の空を眺めやれば、母さまや如何に、わが友や如何にと、流石に泣き盡したる我眼にも未だ一念望鄕の涙は乾かざりけり。」

されどこれも秋と云ふものゝ、つれなきにはあらで、人と云ふものゝ我れにつれなきなり。木枯しに散り舗く落葉の舞ひ上がるを見ては、わが拙き詩想も共に舞ひ上りもせん。蟋蟀の身をきり〳〵すなる秋の夜の間の歌もつゞれ、させよと啼くなりと曰へど、かれもいかでか我れにつれなからんや。いでや日頃の鈍き己が耳にも其の歌の音を聞きわけて、汝が悲みをも分かたんと、獨り密に袖を絞れる夜半はあれども、詩の一つだになきも哀れや。

我れをさなき時は我家の老僕に負はれつ、千鳥啼く我が村の河邊に、虫の音の妙へに面白きを喜び。如何なればかばかり千草に虫はすだくにやと、老僕の痩せさらぼへる肩を叩ゝきて、うち問へるともありしが、その時の老僕の答はげに案外なりき。そは今夜孫を亡くせる故に泣くなりとぞ答へし、然かもさも己れが身の上の如く語り出でたる言ばの尾に、皺みたる枯木の如き片手もて、金米糖の如き涙を磨り消したるがをかしく、老人のさても氣弱きことよとのみ思ひて、近きその頃彼れが一人の孫を亡くしたるに、如何ばかり心やらるゝかを知らでありしが、嗚呼思へば思へばなり。これぞやがて

今の我身の心なりけり。我れも昔は虫の音のいとあい〳〵しきに聞きほれて、まさしく婚姻の歌をこそ謡ふならめなど、猥りなる空想もてこれが解釋を與へし折もありしが。今は如何に昔の樂しきことゞもをたどり出でゝ、せめては慰むべき術もがなと、額に手を加る折はあれども。やさしき彼の君を失ひてよりは、虫の音のたゞ〳〵葬禮の音樂とのみ聞かれて、婚姻の歌と聞かるゝは、たゞの一夜だもなし。

あゝ想へば人は怨みつゝ死に行動物なるか。夢みつゝ然かも今と昔の夢の掌をかへすが如くうつり變れるに魂消えて死にゆく動物なるか。天然は人のこゝろを察せずと雖も、人のこゝろを傷はず。虫の音は悲しと雖も我を泣かすよりほかは己が胸をえ砕かじ。さるにてもつれなきは衣を着たる動物なりけり。彼は罪なき人を噛むのみならず、又た其の肉をも己が飢渇の贄にせんとす。されどそれらは極めて普通のとなり。冷然として路に泣くあはれなる娘あるをも、貧に病む裏棚の老翁あるをも、さては親慕ひて寒さに命も絶なんばかりゆすり泣く棄子あるをも、何の聲かと曰んばかりの風情、憎しとは誰が曰ひけんこれが、唯だ憎きばかりにて何とすべきや。」

それはまたしものとなり。此に信仰あり血あり才あり希望ある天才が、ようようにパンの屑を噢かぢりながらも月に嘯く獅子の如く吼へなんとするに。命なれや過つて狡猾なる係蹄にかゝり、援けを心ある人に呼べるに、獅子の今は餓ゑて力衰へたるを詛ふ人の心の淺ましとも淺ましとも云はんばかりなし。されば我が心臓の友なるベイロンはむかしの文壇に立て曇りなき詩の神のために、此のしむの夷等を平げんとはしたるなれや。その聲のげに山を躍らせ岩を蘇らするの力あるも宜ならずや。さるを世の不具の儕輩は恰も猿の鈴を取らんとて、其の物音に驚きて己が耳を塞ぐが如く、いともいみじき詩の神の聲をも聞かじとするこそ、げに不埒なる仕方ならずや。あゝむかし今の世の愚かなる儕輩は、こゝにいくそばくのくすしき天才を殺したりしとするぞ。よし己れ自らその鋒を取らずとも、熱に打たれ涙に枯れ、膓を天の一方にかけて血をさびしき歌に洗ぎつくしたる果ては、そも誰が罪なりとするぞ。そも誰がその血を吸ひその呼吸の根を止たりとするぞ。今の世の人はこれにも悟りて淺ましき夢より醒むべきなるに、呼ぶとも〳〵醒めぬ夢めこそ、げに世は土塊の會場なり

けり。

わが今更にこの事を慨くは、私にかゝる悲憤のありてにあらず。はた我が不遇を自ら弔むらふの涙にもあらず。我は最早わが爲に有る限りの涙を注ぎ盡しぬ。我は最早我身のためには如何に泣かんとする、注ぐべき一掬の涙をも有たぬなり。されば我が今これを慨くは文字の上にこそ俄かなる調子にてあらめ、我が獨りの心の中にては、早や〳〵古き苔あるむかし語りのことなり。我は我がために泣くにはあらず、わが尊敬する世の幾多の天才の爲に慨くなり。我はこれ云ふにも足らぬ端した物なれば、馬の骨と抱き合ひて一尺の空地にわが運命の歴史を刻み、快く朽ちもせめ。茫々たる青草は少しばかりの蔭を分ちて、わが爲に亡き跡を弔ひもせめ。されど遂に世の幾多の天才の不遇を如何にせんや。あゝこれを思へば歴史が常に天才につれなきを泣くわが涙は、いつとても乾く間もあらぬなり。

唯だ心よりして願ふは幸にわがこの傷ましき文字をして、世界のまことなる肖像たらしむるなからん時の、鴿の如く天の一方より降り來らんことを。而して我はこの消息の爲に奮ひ

起りて、足の毛をも磨り消し、心臓の血を吐き盡すの義烈侠熱あらんことを君に望み、且つ世の天才に望まんと欲す。然らざれば世は永遠に葬祭の傍に浮かれ節を謡ふて一向に平氣なるべきなり。

嗚呼これにても血温かなる人と曰はるべきか。これにても此の世は神の支配し玉ふ道理ある世界なるか。思ふに今は人の定義を新に作り更ゆべき時代なり。若し我をしてその定義を與へしめなば、我は方に曰はんとす「人とは殺されたる人の血の河面に己が姿を認めて平氣なる動物なり」と。血は然かも多くは實に天才の血なり。

我はこの血の一滴たらんが爲に、わが生涯を献げ得ば無上の光榮として、滿足の永眠に歸らんと欲す。あら君も又た進んでこれが一滴の血となれよや。世は血に渇く、我は殺さるべく生れたり。嗚呼…………

一夜霜寒ふして雁聲ことに哀れなり。窓を打つ木枯しの音に我が嬉れしき夢は破れて、悲しき現に歸りぬ。肱を枕して耳傾くれば秋聲天地に滿ちて夜はいたくも更けぬ。強ひて睡らんとするに睡り反て成らず、睡らじとすれば萬愁胸を嚙む。

我は則ち已むなく同情を机上の「ウヱルテルの憂愁」に需めぬ。あゝその夜我は實に其の絶痛なる最後の悲劇を讀めるなり。心ありて讀みもてゆけば、文字動き紙將に叫び出でんとす。眼を閉ぢて幽冥の域にわがウヱルテルの風采を追へば、背後に聲ありてまさしく我を呼べるものあり。顧みてゆかしき其の聲の主を探ねんとすれば、孤燈光薄ふして唯だわが力なき影の壁隅に印せるあるのみ。更に讀みもてゆきて巻末遂にピストルの聲を聞くに及んでは、我が喉は乾き、我が唇は慄ひぬ、あまつさへ天地俄に鳴動して風雨忽ちに至り、夜陰悽惨として點滴の音切りにわが膓を叩くをや。我は遂に一夜眠る能はざりき。

あゝウヱルテル彼は實に苦痛の贄となりて逝けるなり。われも又たその苦痛の贄とならんとはすなり。想ふ始めウヱルテルの其戀人を失て憂愁を天然の懐に遣るや、少しくは自ら慰さむる處ありしなり。其の溪泉樹林の間を逍遙して、鳥語流水を聞くや、その思ふ心の何處に飛び行きしやは知らず、たゝ〳〵彼は強て自ら樂まんとせしなり。されど人は遂に天然の胸に抱かるゝのみにて滿足し得るものにあらず。彼れが破れし心の膓は或る新たなる物を需め始めぬ。然るにその或物は決して彼れの所有たるべからざりき。此に於てか人性自然の要求は拒まれて彼れの心は亂れぬ、泣きぬ、もがきぬ。而して遂に自らその呼吸を絶ちぬ。あゝ世の人はこれをしも何とか冷笑せるや。はた又た何とか罵らんとするや。まことに淺ましきは進んで安命の地を需め得ず、退て世の非なるをも改めず、唯だ意味もなき一枚の黄金に明日を樂むあはれなる世の嘲罵なりけり。

我は最早ウヱルテルを讀まじと君に誓はん。否我は讀み得ざるなり。何となればウヱルテルの憂愁はやがてわが憂愁なればなり。我れ眠れども我が眠りはまことの眠りにあらず。われ笑へども我が笑ひはまことの笑ひにあらず。唯だ涙のみぞまことの涙なりけり。されど涙も今は乾きぬ。我胸には蛇の如き曲者住みて絶へず毒の舌を吐き、わが頭には毛虫の如き曲者ありて絶へず我が頬の肉を嚙む、されど我は唯だその爲すがまゝに委かするなり。さるに君はさきには我に近き頃の寫影を贈れよと請はれぬ。我はそを君にあるまじき殘酷なる仕打なりと思ひぬ。我が眼は凹み我が頬は殺げて涙道の跡自

ら讀まるゝばかりなるに、如何でか我れはそを能くし得んや、唯だ瘠せさらぼひて心沈みたる我は、又た當年慷慨の我ならずと知りたまへや。秋風情なく徒に我が寒き胸を刺す。

われは又た此の我が苦痛につけても、世の紳士と仰がれ淑女と敬せらるゝ人々をば反て憫れに思ふなり。彼等は己れが一朝の食費の價は能く貧民十人の生命を繫くに足るを知らざるか。彼等は又た己れが胸間一個の鈕子は能く孤兒の一生を救ひ得るを知らざるか。否々彼等は皆よく之を知るなり。その之を救ふは己れが富者としての義務なるをもよく知り居れるなり。唯だ彼等は其を充分に知りつゝも救ふをえ爲さゞるなり。獨り救はざるのみならず、無殘にも猶ほ此を搾して、己れが舞踏一夜の費に滿てんとはするなり。あゝされど試みに思へや、貧しきは我に何の罪かある、富みたるは彼れに何の權かある。權と罪と今にして我は凡てその黄金の指の仕業なるを悟りぬ。

嗚呼社會は斯くの如く常に冷々淡々たり。罪なき可憐なる人、夫れ何處にか適歸せんや。我は素より一尺の空地に我が肉塊を埋めて、一莖の草を肥やすを以て、我が生涯の光榮として

滿足し得べし。されど遂に世の幾多の罪なき哀民と、世の幾多の罪なき天才とを如何にせんや。彼等は又た何故に我れが如き運命に驅られざるべからざるか。何故に路傍の草根を喫じりつゝ餓へざる可らざるか。何故に心臟を吹き破りつゝ斃れざる可らざるか。我は終に其の「何故」と曰へる理由を發見し能はざるなり。若し人ありてそのたしかなる理由を發見したらんには、我は喜んで其の謝罪として土黒き墳墓に隱れんと欲す。此の世は最早我れに用なければなり嗚呼墳墓。如何にやさしく、如何に温和なる我等の救主ぞ。我は生活の神よりも寧ろ遙に死の神を愛するなり。あゝ墳墓。我が憂れひは其處に歸らざれば、遂に安息の平和に入る可らず。

君はまた我が亡き勇美子のむかしを繰り返へされぬ。我を泣かせんとてか我は最早泣かざるべし、否まことに泣き得ざるなり。勇美子は今や天の人となりぬ。我が勇美子に對するの心も今は變はらざる可らず。此の地上の美しき勇美子としては、我はわが生命の如くに愛しぬ。天にある勇美子は美しくまた聖き勇美子となりしなり。されば我は夕暮れつ方日のようよう沈みておぼろなる空に、聖き高き星の唯だ一つ、やさ

しき微笑を含むをふりさけ見る毎に、我が心は空に飛び星に飛びて、やがては其の星と一躰となり。さてはまた我が戀しき勇美子と、天の野のいと靜かなる小河邊に、相抱きて嬉れしき昔しを語りつゝ、流るゝ水の歌に催ふされて面白き夢に入るなり。あゝ此の時の我がこゝろよ。この時の我が衣よ。花に舞ふ白雪の清きしらべよりもいや妙へに、わが胸の鼓は鳴り、錦の衣よりもいや美しく、黄金の冠をわが上に翳ざさるゝなり。されど――あゝされど君よ。此はやがて醒むべきの夢なり此はやがて消えぬべき空想なり。この夢より絶れ、この空想より蹴落さるゝ折のわが心よ、わが哀れさよ。我は最早世に存らふる能はざるなり。我は幾度かこの夢、この空想をたどりて、今一度わが勇美子を見んとあせりたれども、あゝ無益、遂に無益なりき、我は世に友もなきものとして、唯だ獨り此處にあるなり。此の煩はしき、この擾はがしき、此の僞り多き世に、兩の耳を蔽ひ兩の眼を閉ぢて、世の聲世のさまを見じともだへ居るなり。されど我が勇美子は今や既に亡じ我れ離れと共にか此の憂ひを分たんや。勇美子の亡き形見の印は、今や故郷の村寺、老ひたる榎の木の下蔭にあり、我は曾て此處にて泣きぬ。くづおれぬ。くづおれて我を忘れ、世を忘れ日の落つるをも忘れぬ。その寂びしさは我れには云ふ可らざる樂みありき。我は今ま其の寂びしさを慕ふなり。否、我はその寂びしさの今にも我を待ちつゝあるが如き心地す。秋の哀れは深うして我が思ひは盡く可らず。嗚呼さらば君よ、おさらばおさらばなり。

寄野中氏夫妻祝新婚

青柳猛

幽凄なるデルフワイの空洞に、輝くアポローの神託を受けたるにもあらず、將又ドヾナのオレークルに、全能全智にまし給ふジユーヴのみことのりを下されたるにもよられど、睥睨たるヘリコンの頂、ヒポクリニーの清泉淡々として流れ出るほとりに、折にふれて其影をうつし給ふと聞く麗澹なる詩美神、ユーテルピーの聖き默示を蒙り、茲に暫く思を走せて富士山頂にありし野中至氏夫妻に寄せ、石川角次郎兄と富田八重姉との聖婚を祝しまつらん。蓆莚を宰り給ふといふジユノーの女神も、いざや此の處に降りませ。玉もまづし出雲の國の御社に、高御座をすゑ給ふおほ命、あはれ之を如何に見そなはし給ふや。

明治廿九年一月廿日

友人 青柳猛

新はたかくいろりに積まれ
近づく者は顔紅をなす
森の神の曰く『あたゝかなりや〳〵』
獨身者の曰く『なほ一枚を重ねたきこそ
げに不思議なれ』

見渡す限り雪やまをなし
荒ぶる風はよく石を捲く
山童の曰く『寒さは如何に〳〵』
野中氏夫妻の曰く『高砂とまに住ふ如きぞ
げに不思議なる』

提琴の音はほがらかに鳴り
羽衣翩て春風を起こす
哲學者の曰く『なにのうれしき〳〵』
天使の曰く『異性相寄りて離れざることそ
げに不思議なれ』

新婚祝歌三韻

其一

渦谷葉苑氏作歌
スリヴァン氏作曲

（一）
美はしきかな　我が妹は
谷間にさける　百合のはな
こぼるゝ露は　千代たえず
愛の泉と　なりにけり

（二）
いさましきかな　わが背子は
旗をあげたる　つはものゝ
いさめる駒に　うちのりて
さきをきほふに　にたりけり

（三）
人も澤なる　そのなかに
えらび〳〵て　もろともに
ちぎりかさねし　ふたりにぞ
神のみむねは　なれりける

（四）
いざやうたひね　山よ野よ
森よ林よ　月よ日よ
聲をあはせて　妹と背を
いざやうたひね　みなともに

其二

島崎藤村氏作歌
マクノートン氏作曲

（一）
歌ものがたり
千束にたつる
さらば妹背の
希婦の郡に
君しるや
錦木を
その名に著き
ゆきねかし

（二）
羅綾のこころも
月もしづかに
さらば染花の
玉の臺に
君しるや
まふ袖を
夢さめやすき
行きねかし

（三）
白百合の花
さけばうつろふ
さらば色よく
人なき野邊に
君しるや
花の香を
ちり果ぬ間に
ゆきねかし

（四）
妹背のちぎり
清きこころは
千年のみどり
かはらぬいろぞ
君知るや
松が枝の
その手に滿て
染めけるを

（五）
朽つるをりあり
やれてはうすき
野の百合のはな
世々にかはらじ
錦木も
あやごろも
移ろひぬとも
このちぎり

其三

櫻井鷗村氏作歌
無名氏作曲

（新郎歌ふ）
今日我妹子に
うれしさのみと
神はかりせし
千とせをかけて
あなうましきかな
神のめでたまふ
あふときは
おもひなる
まゝなれば
ちぎらまし
あなうましきかな
我妹子にあひぬ

（天使歌ふ）
神のめぐみの
いく世のえにし
うるはしみもて
幸のみいとゞ
あなうましきかな
神のいはひたまふ
いもにあひ
むすふべし
世にへなば
おほかりなん
あなうましきかな
二人いまあへり

（新婦歌ふ）
今日我が背子に
うれしさのみと
神はかりせし
千世をかけて
あなうましきかな
神のめでたまふ
あふときは
おもひなる
まゝなれば
ちぎらまし
あなうましきかな
我背子にあひぬ

（天使歌ふ）

神のめぐみの
いく世のえにし
うるはしみして
幸のみいとゞ
　あなうましきかな
神のいはひたまふ

背子にあひ
むすぶべし
世にへなば
おほかりなん
　あなうましきかな
二人いまあへり

新刊書

○女子處世論　國光社版

妙齢婿氏に別れて、其遺孤の養育に辛酸を共にし、傍ら帷を下して、郷黨の子弟に學を授け、其後故岩倉公の聘する處となりて、其家庭の師たり、而して齢既に五旬を過きて今なほ筆に業に、女學に卒ぜらるゝ、三輪田眞佐子女史、曩に「女子の務」の著あり、新春更に此「女子處世論」の著を公にせらる。吾人は女史の如き、巾幗の老才によりて、此種の書の成るを喜ぶ。章數二十三に及ぶの處論、敢て異さすべきものあるなしさ雖も、是れ多經驗なる女史の筆なり、故に一々後進女生をしての頭て其教ふる處に傾聽せしむべし。而も其文字は、女史が和漢の學才に富贍なるを、十分に發揚して、字句の悠々迫も逼らざるは、到底今日の少壯操觚者流の企て及び難き所たり。當代女流の文章、實に女史を推して第一品さなすべし。女生たゞに此書の敎ふる處に聽くのみならず、また其文章に於て學ぶ處あらば、益を受くるを必ずや多からん。

○桐一葉　春陽堂版

文壇の老將春の家主人が初めて、其堅筆を劇詩壇に振つたる此『桐一葉』、其愁嘆悲に情がうつらず、且元に貫目の足らぬ憾みありさ雖も、「我が名に因む庭前の、梧桐悉く揺落なし、凋落たる天地の秋、ア有情も漏れぬ盛衰は、ハテ是非も無き、定めぢやなア」の片桐且元が苦忠を描かんが爲めに、主人が苦心したるの跡は、其趣構文字に歴々さして見ゆ、口さがなき京童が春の家氏、此作を以て、文學博士の人爵を購はんさして未だ及ばさる處あり、更に「牧の方」を出すさ虛實の程の知れ難き噂に立つるも蓋し主人が劇詩作に於ける精勤苦心の多きを知ればならん。

○青年小說　博文館版

鏡花の「化銀杏」天外の「改頁若殿」、靑軒の「可憐兒」、宙外の「ありのすさび」花袋の「無名草」、愈盧の「仲左」、玉茗の「韮の花束」、風葉の「看護婦」春葉の「百尺匿」、ゆふ風の「綠日」等を一括せるもの、之を文藝倶樂部第二卷第貳編の「靑年小說」さす。彼此を讀むべきの作なれども、此等は以て靑年作家（靑年さいへは未熟の意味に聞ゆれども決して然らざるものあり。）其人等が今日までの諸作中の第一品のみに非らざるが如し。

○○鳰の浮巣　大和武士　春陽堂版

前者は三昧に成り、後者は麗水の作、共に彼此さ評し立つる程の大作にてもなきが如し。

以下の新刊書十種は、寄贈を辱うしたる後、既に社評を草し置きたるに、去る五日の災は、其原稿を灰燼にし、書籍亦散す。故に爰に只其書名を列記して、寄贈者の好意を謝す。

新地理學　日本の部	松島剛著	春陽堂版
貴女の栞上下二册	國分操子著、	大倉書店版
きせわた	薹村作	春陽堂版
五調子	夕、眉、天、柳、水五人合作	春陽堂版
笛吹川	紅葉山人作	春陽堂版
幸堂滑稽談	幸堂得知作	博文館版
文藝倶樂部第貳卷第一編		博文館版
惟任日向守	恐月居士作	春陽堂版
朝日櫻	弦齋居士作	春陽堂版
海戰日錄	金波樓主人著	春陽堂版
戀愛の福音	加藤直士著	福音社版

時報

明治女學校の類燒、及び巖本嘉志子の死去

去五日午前二時半、明治女學校は其の貸長屋麵包製造所より出火せしため類燒し、塾舍と貸長屋の半部を除く外、校舍、別舍、島田館（西洋女敎師住居）、校長舍みな烏有に歸しぬ。超えて五日、即はち十日午后一時半、巖本嘉志子は、肺患昂進し、心臟痲痺の爲め死去したり。何れも、吾社と關係淺からざるものにて、玆に其顚末を記述するの力なき心地せらる。即はち、諸種の新聞雜誌に上りたる記事の若干を轉載し、吾讀者に其の一斑を報ずるに代ゆと云ふ、

◉明治女學校の火災

十年一日の如く、確實なる志望と、不羈の精神とを以て、囂々喧々たる世間數多の是非の間に屹立し、漠々、濛々たる女學界に新旗幟を飜へし、幾多の試鍊を踏破して、洋々たる春の海の如き、明治女學校は、去る五日午前二時半、貸長屋より火を失し、遂に寄宿舍の外、講堂、食堂、別舍（巖本氏の寓せし所）洋館等全く祝融の詛ひの舌に嘗められ畢んぬ、但し災起るや、否や、巖本氏は生徒一同を伴ひて、難を避けられしかば、すべて無事なりき、其の他敎員諸氏も、非常に盡力せられしかども、事の急なりしがため、書籍、機械等も燒失せり、然れども不日殘りし所にて、學課を始むべしといふ

（福音新報第三十三號）

◉巖本かし子逝く

讀者は吾が邦女流文學者のうちに若松賤子あるを知る。若松賤子とは小公子と題せる飜譯小説に巖本善治妻と見えたる巖本かし子其の人なるも多數讀者の知る所ならん。

女史は吾が邦基督敎徒女流文學者のうちにては最も廣く人に知られたるもの、其の蒲柳の質を以て世に公やけにしたる家庭文學も少からず。晩年に至り、宗敎上の鍛錬大いに進み、靈性一變せり（其人の手書に據る）と傳ふ。若し之をして倘ほ健在ならしめば、宗敎上の家庭文學其の手を經て出づべきを疑がはす。

女史久しく病に苦しまれつゝありしが、終に去ぬる十日午後一時三十分良人と二人の愛兒とを遺して遂に他界に入りぬ。死する前日遺言して曰く、何の傳記もなし、唯だ
　終りまで基督の惠みを知り居りし婦人
とのみ記されよと。其の宗教上の有樣また知るべきなり。我等の記臆に誤りなからしめば、女史は元治元年を以て生れ、年を享くる僅かに三十三、有益なる才能を抱らして遽焉他界に逝く。基督教徒女流文學のために之を惜まざるを得んや。

（福音新報第三十三號社說）

◉千古不滅壺中の書

染井の綠陰幽かなる處靜かに永眠せる閨秀文學者若松賤子女史は會津藩士某の女なり八歲にして外國人に就き英學を專攻せしが天稟の才發に進步殊に著るしく橫濱フエーリス女學校在學中の如は常に校中の白眉を以て稱せらる而して文學は最も其長所にして日常の談話直に文章を爲す渠が文を作るや一瀉千里毫も佶屈の痕なきは蓋し之が爲なり彼の『忘れがたみ』および『小公子』の文章の如き巧を求めずして自ら巧に他人が潛心刻苦する處も女史は容易に書き下し得るなり又和漢文學の如きも常に嚴峻なる父母の教訓の下に修むる處尠なからざりしと渠はまた死に臨み遺言して其傳記等は編せしめざりき兎に角英文學に精通するものを今の婦人間に求めば女史は實に其翹楚たるべし其之を葬むるや柩と共に相並べて一個の壺を埋めたり壺はチヤンを以て堅く密閉したるものにして其如何なる者が此中に存するやは會葬者を初め世人の疑ふ所なり此ぞ葬送當日即ち二月十一日發行の諸新聞及び近刊の雜誌文學書及び夫人の著書遺稿を收めたる者にして今後幾百千年を經るも一度之を發掘したらんもの壺中の書を一見して直ちに明治聖代の文運は如何の程度なりしか及び此時代には若松賤子となん呼べる閨閤文學者もありけるよと遠き世の考古學者及び人類學者に唯一の材料を與へんとの思慮に出でしものにて此も女史の友人等と良人嚴本善治氏が殘る方なく執り計ひしものなりとぞ

（十八日讀賣新聞）

◉嚴本嘉志子葬儀のとき

湯谷礎一郎

荒野さうるほひなき地さは樂しみ沙漠はよろこびて番紅の花の如くに咲きかゞやかん、．．．爾曹萎へたる手をつよくし弱りたる膝を健かにせよ心さはがしき者に對ひて言へ、爾等雄々しかれ、懼るる勿れ、爾等の神を見よ、神來りてなんぢを救ひ玉ふべし．．．（賽三十五章）

文天祥云へることあり、棺を蓋ふて而して後事定まると、人の此の世にあるや、一是一非、批評亦た一高一低、毀譽褒貶は、宛かも風車の如く、固より頓着するに足らざるなり、唯だ其の間に介立するに當りては、自ら信ずる所を行ひ、自ら立つ所に依りて以て進むべきなり。乃ち之れを眞人とは謂ふなり。さて世を去りて逝きし人を、追念し來れば、恰も小瑕ある白珠を、日光の前に抛ちしが如し。縱令其の多少の疵瑕あるにもせよ、之れを望めば、輝々としてきらめき、目眩ぐばかりなり。よし多少の缺點あるにもせよ、故人を追懷し來れば、則ち品格といひ、性質といひ、其の美しき點のみ、きら〳〵として輝きわたるなり。故の巖本夫人は、遺言して其の死を公けにすること勿れ、履歷を朗讀するが如き、俗流に從ふこと勿れ。我は敢て傳記などに堪ゆるものにあらず、人の前にて彼是言はるゝ程の身分にもあらず。唯だ只だ終りまで主を信じ、其の恩寵をさとり、之れに事へし者たるのみと。然れども安んぞ知らん、此の謙辭は、人生の最も價値ありて最も高貴なるものにあらずや。故に其の遺言に從はんと欲するとも、倘ほ一二の美點を追念し、今之を茲に告白せずんばあらず。

第一　其の率直なりしこと。今や世は權に阿り、名に媚び、叩頭頓首、自家の意志を枉げ、勢に追從す。率直よく其の己れの德を完うする者、果して其れ幾許ぞ。然るに夫人は善く此の得がたき美德を具へ、其の言はんと欲する所を言ひ、語らんと欲する所を語り、敢て人意を迎へず。是に於てか、或ひは己を知らざる所の人意を害したることなきを保せざるなり。若し其れ之れをしも、疵瑕なりと言はゞ言へ。然れども人意を顧みずして、アドヴハイスを與へ、よく之れを教訓しよく之れを奬勵せし所は、眞に白珠の輝々たるものにあらずして何ぞ。

第二　其の堅忍なりしこと。良君は夙夜公共の事業、友人の世話に奔走し、身家を顧みるに遑暇あらず。此の時は夫人は、病痾ほとんど一身に堪へざるにも拘はらず、兒等を擁して、王子に幽居せり。夫れ室家團欒、夫妻偕居は、人生の喜樂にして、萬人の望む所なり。然るに夫人は、怨まず、怨言かず、自ら己れを勵し、良君をして、内顧の憂あらしめずして、よくこれに堪へしは實に堅忍の至れるものにあらずや。

其の躰軀健康なれば、固より稱するに足らずと雖も巖軀よく之れに當る、常人數倍の苦なりといはざる可からず。況んや火災後、良君は校事に鞅掌して家に歸らず、距離わづかに一丁の所にありながら、二日目はじめて相對語せりといふが如き、其の一斑を知るべし。其のすでに病床にありて呻吟せる場合に至れるも、敢て口自ら之を迎へんとするの風なく、令妹枕頭に侍して、其の情に堪へず、密かに之を氏に告げしめたる位なりき。故に氏が其の病床に侍せしは、實に最終僅々たる日數のみにすぎざりき。

第三　其確信ありしこと。余は其の過去の多くの時を知らずと雖も、殊に昨春に至りて、其の靈性は大に開發せられ、確として動かざる信仰と、一切を主と良君に献げて、愛惜せざる精神は、益々強固となりたりき。其の終りに臨み、病苦に堪へざるにもかゝはらず、精神はいよ〱平和にして、最後の五分前までも、語氣明白、よく人事を通じたり。良君試みに其信仰を確めしに、然りと答へられき。而して其の後は唯だ默然として語なく、眠るが如くなりしといふ。余が偶々來訪せしは、實に此の瞬間なりき。余は宛かも大理石の彫像の如き、其の顔に平和の氣靄然として棚引けるを見て、確かに其の確信の鞏固なりしを悟り、心ひそかに先づ之れを天に謝せりき。

噫夫人逝けり矣。彼女は明治女學校の災に殉せり。蒲柳の身吾人もとより多年を過望せざりき。然れども豈旦夕の間、實に今此の永別に際會せんと豫期せんや。嗟吁悲い夫。

然れども今や一の新なる靈は、良君の事業、及び學校の上に加へられたり。彼女が密かに良君と、學校との爲めに祈りし其の精神と、將又其の災に殉せし靈魂は、永く諸君と共に生存して朽ち果つることなかるべし。諸君、今若し彼女のために、わく所の血あらんか、濺ぐ所の涙あらんか、此の血と涙とは、彼女が焦慮苦思せし、事業のために傾注せよ。是れ乃ち吾人が彼女に對して、應さに爲すべきの務めならずや。今や吾人が魂は萎へ、心は碎けたり、然れども神若し其の御手を吾人の上に、伸べ玉はゝ、則ち荒野は樂み、沙漠はよろこびて番紅の花の如く咲匂ひ、將來の事業は、愈益隆昌、多福なるべし。是れ乃ち彼女の地上にたてし十字架が、

天にまで到達するものにあらずや。若し其れ此の遺兒たちに至りては、吾人また是れより各應分の當さに爲すべき所なきにあらざるなり。仰ぎ希はくは皇天、上帝の眷顧、祝福永遠に此の遺族の上にあらんことを、（福音新報第卅四號）

◉巖本嘉志子

前號の紙上にて、明治女學校の不幸を報告する所ありしが、尙ほ更らに一の大なる不幸は、巖本氏の上に加へられたりき、是れより先き、同夫人嘉志子は城北王子の閑居に在りて、痾を養ひつゝ、數年を經過せられしが、客秋都合によりて、一家を纒め、明治女學校の内に移られたりき、春來の不眠症は、夏ごろに至り、稍回復せしが、空氣不良のためなりしにや、轉宅後は呼吸に困難を感じ、且つ又年末の頃インフルエンザの犯す所となり、輕快後も兎角前の如くなること能はず、友人等も密かに憂ひて、更に轉宅しては如何など、勸告する所ありしも、巖本氏は他の義俠なる、教員、舍監達に對しても、心に安からずと拒みて、容易に動かず、彼是せし内に過日の火災あり、是れが爲めに只さへ風に堪へざるが如く見えし、蒲柳の身の、如何でか過勞に忍ひ得べき、遂に超えて第三日、乃ち七日金曜日の夜より、翌日の朝にかけて、吐血し、煩悶來り、疲勞漸く迫り、十日月曜日の午後一時半、遂に晏然眠るが如く、永遠の御國に移されたりき、是の時、校舍の一丁ばかり西なる石川角次郎氏の宅に假寓し居られしが、事まさに急ならんとするや、人あり馳せて、校舍の燒餘の所にありし、其の幼兒達を迎へしが、彼等が人に負はれつゝ、最後の面會に急ぎ着せしも、すでに後れし數瞬間、巖本氏は二兒（長女は七歳、長男は六歳）に命じて、『お阿母にさようならと仰つしやい』と言はれしに、側にありし友人等は、今は堪へずやありけん、思はず欷歔涙に咽びしに、知るや知らずや、二兒達も之れに驚きけん、聲を放ちて哭したり、未だ二回の誕生日を迎へざる、二女は人々のさはがしきに嘻々と笑ひければ、人々は更に慟哭せり、

さて今回は、學校遭災の際にもあり、且は逝者の遺言もありければ、旁訃を報ずるは、逝者の別懇なりし人々に限り、十二日午前八時、假寓にて葬儀を執行す、石川氏會を司どり、湯谷氏說教し、後城北染井の墓地に送る、傳へて會葬せし者數十人、墓地に到れば、友人等柩を迎へて、之を負ひ、塋に

到らんとする時、前着せし女生達はフユーチラル、ヒムを唱す、逝者の靈亦斯の如くエンゼルス(天使等)に迎へられしならんとて、涙下だるもありき、墓地にては湯谷氏司會し、櫻井彦一郎氏詩篇第九十を朗讀し、青柳猛氏祈禱し、フェリス女學校長ブース氏祝禱し、悲哀にして而かも希望的なる唱歌の裏に、柩は遂に土に埋められ畢んぬ、良人は良婦を失ひ、兒等は慈母を失ひ、友人は好友を失ひ、文學界亦若松賤子てふ、一女星を失ひぬ

(福音新報第卌四號)

◉若松賤子　一新生(投)

閨秀小說家として久しく令名を文壇に博せる、若松賤子女史泣きぬ。余は之を聞て二十日前を思ひ幾度か涙を拭ひぬ。

本年東京に雪降る事二度。始めて降りたるは一月の何日頃なりけむ、今思出能はざるぞ遺憾なる。其日の夕暮なりき。余は歩減せし下駄の積りし雪に苦みつゝ某西洋婦人の家に至りし事ありしが、室に入ると同時に、先づ我眼にかゝりたるは、安樂椅子によりたる一人の婦人にてありき。閨秀小說を讀みたる余は、一見直ちに其何人なるやを知りぬ。

曇天に加ふるに夕暮のかなしさ、室内薄暗くして判然せざりき。余は言葉の間に熟々女史を見るに、尠なからざる氣黒き髮は左程亂れて見えず。眼は少し窪みたる樣に思はるれど、眼鏡に遮られて明かならず。頬は全く落ちて骨高く顯はれ、面色の限りなく白く見ゆるは、數年病床に苦むが故ならむ。其熟練なるコンバーセーションの聲は小く力無くして、中途に暫し止りて呼吸を休むる屢々なりき。頓て一人の女は洋燈を持來りて、余が横に椅りて右臂つきたる机上の、我手先に置きぬ。此時女史は此方を瞻めしが、身を少し前に挽め、右手を伸ばして、燈火を明くなしぬ。嗚呼其手の指の如何に細くして白く、血色なかりしは、余が思はず涙に哭れむとしたるにて知らむ。

余は女史の名を知る久しと雖、女史に遇ひたるは此偶然の一時のみ。折々椅子の動きに連れて身は動き、頭の時々動きし樣、我前に其手を伸ばせし樣など、余が常に女史の名を思ひ出す毎に。尙其有樣の我眼前に明かに現はるゝは、一度女史を見たるのみの故にてやあらむ、或は思はず涙に哭れんとしたる故にてやあらむ。

女史逝く數日前、校舍悉く類燒に終る。夫が病床に苦む女史を棄てゝ、他の救ひに走りたる時には、女史の心は果して如何なりしならむ。女史の病の或は早晩望みなきやは之を知るものゝ等しく憂ひたる處。然るに今に至りて此禍ひあり、其悲み焉ぞ盡きむ。

余が知れる人が始めて東京に出で、某校に臨みし時に、是れ恰もフェリス女學校卒業式に際し、演壇に顯はれ英語演說をなせし者は即ち女史なりきと、あゝ是れ何年の前に當る。

女史忘れ形見を以て始めて世に顯はれ、忘れがたみを以て世を去る。是れ果して何の因による。

今朝起きて再び雪を見れば何ぞ知らむ、又女史の死を見んとは。忘れ形見は忘れがたみとなり終りぬ

(二月廿日、國民新聞)

◉明治女學校　昨夜二時頃鄰家のパン製造所より出火し、宏大の校舍盡く皆な燒け落ちたり、殘る所は僅に表門の一面と角の酒屋より日本宗教實揃所に並びし三四軒を餘せしのみ吾人は一時も早く再築のあらんことを望む。

(二月六日毎日新聞)

狩はやし燒けあとのさぞおさむかろ　(味)

もえいでよ紫匂ふはつわらび　(花)

◉嗟々岩本令夫人逝けり　若松賤子の名を以て文壇に芳名の高かりし岩本夫人は十日午後一時三十分肺患の爲めに卒せられたり、夫人の遺言により生前の親友のみに通知し、葬式も質素にして本日染井の墓地に埋葬せらるゝとぞ。(女史の小傳は他日に讓る)

(十三日毎日新聞)

◉巖本かし子逝く　若松賤子として其名明治女流文壇に一頭地を出せし巖本かし子（明治女學校長巖本善治氏夫人）は數年來肺患に犯され荏苒茶爐藥鼎の間に起臥せしが本年に至り病頓に革まり去る十日午後溘焉永逝せられたりといふ同子が一種獨得の文筆を以て家庭其他の讀書社會に寄與せしもの甚だ少なからず其造詣又測られざるものあらんとして僅かに三十三才の壯齡を一期とし此事ある深悼余ありありと謂つべし　（基督教新聞）

◉巖本夫人の葬送　二月十二日午前九時夫人の遺言により、平生の親友或は女學校の生徒のみ送りたり、されど二三丁は遥く車を連れて肅然たる葬式たりき、十一時頃染井の墓地に送り、女學生等の凄然たる讚美の中に式を了りぬ、霜解の道を女學校の教師等が周旋し、鮮衣の汚れも厭はず棺を担ぐなど、平素の交際も知られ友愛の麗はしきこと他に稀なる樣なりき、夫人は七才の女子を頭として三人の愛兒を後にのこし、親戚朋友が手に／＼投げ入るゝ土の冷やかなる裏に眠れり。　（二月十四日毎日新聞）

◉小公子後篇の譯　夫人は後篇の譯を完くし、筐底に納め置れしに先頃の火災の爲に燒き失なはれたり、後篇の譯は前篇よりも更に好く、夫人も病苦を推して筆を執られし甲斐ありと悅こばれ居りしと聞くに、噫！　天無情、稿本をも大火裏に抛うち去れり。

女史の如き譯述の筆力ある者は我等再び視ることを得るや否や豈唯だ女流社會のみならんや。　（同前）

◉明治女學校　先般類燒の不幸に遭逢したる同校は巖本校長が家庭のなげき內外の混雜交も蝟集するにも拘らず毅然として善後の設策につとむるの赤誠と校員の熱心なる幇助とにより災後の跡かたづけも略纏り殘務漸く其緒に着きたるを以て來る十八日より從前の如く引續き教授をはじむる由但し當分は其殘舍を用ゐ追ては新校舍建築の準備に着手すといふ　（同前）

◉今後の明治女學校　同校の類燒につきては其校の本領を知ると知らざるとなく同情の感に堪へざるところなれども刖けても女性教育に畢世の心血を絞る同校長の心事を解するものは一たびは突然の出來事に驚絕したりしも後には却つてこの小頓挫の校員校友を奮發して一段隆盛の域に進ましむるの占をなすものなりとし會する毎に相親するの意氣込にてひたすら善後の策に盡瘁し滿天下の人々も双手を舉げて應援せんとするのさまなるが追ては義捐等を以て同校の資金の幾分に充さむとする特志者も多くうちにも三井組の馬越恭平氏の如きは心からして同校の便宜を計り先づ取敢へず五十圓を寄送し更に同校敷地に對する貸與料を向ふ一ヶ年半寄附せしむるやう盡力したるなど其熱心のほどおさ／＼嘆美に堪へたるものあり斯の有樣には校長初め校員一層の勇氣を加へ當分のうちは殘舍を修繕して教授をなし一ヶ年半後には校舍を新築して萬般の規摸を整理するの經營中なりと而して巖本校長は萬事を抛つて四方を周遊して同志の贊助を天下に求むるといふ。　（二月十九日毎日新聞）

◉若松賤子遺稿　今年の春は何の春ぞ、閨秀一文星、雲のあなたに隱れ去りて、空しく梅萼に對して千行の涙あらしむ、巖本夫人が英文に巧みなるは、今更いはず、其溫々たる情緒と、玉の如き熱愛とを一枝の筆に發露するや、人をして讀むで醉を脫して、樂園に遊ばしむるが如きもの、思ふに女史が、愛に充るの裏に發して、その眼に閃き口に溢るゝもの、情にあらぬはなく、愛にあらぬはなし、その無垢玲瓏たる詩趣饒かなるは、これが爲めにあらずや、今や同人相計りて遺盛斷篇のこゝかしこに散ずるものを蒐集し、一卷となし一には紀念追弔の意を表し、一にはその筆の香を絕ざらしめむとすといふ、喜ぶべきの擧なるかな、因にいふ小公子の後篇は空しく灰燼となれりと思ひ居たるに、こは誤にしてその大筋は女學雜誌に載せられてあり、たゞ女史が病間、心をこめて筆を加へたる草稿の空しくなりしなりといふ　（二月十九日毎日新聞）

◉明治女學校は、本月五日午前二時半頃、隣の家パン屋より出火し、爲に女學校は類燒の災に罹り灰燼に歸せしが、さすがは基督教的教訓の行屆といふべきか、寄宿生廿名ばかり平生示し置れたる非常心得を守り、少こしも狼狽する所なく、嚴重に衣服の身仕度を整へ、取締に導かれて避難したりと聞く。　（福音の使第七十七號）

◉明治女學校の類燒　日本基督教主義を以て宣教師派女學校以外に獨立せる明治女學校は明治十八年九月木村鐙子の發起に係り以來茲に滿十年其盛大につれて次第に其規摸を擴張し又校堂を變更すること前後三回に及び麴町下六番町六番地に新築移轉開校の典を擧げしは明治二十三年九月なりき爾來朝野人士の贊助を得て苦心經營以て今日あるに至りしが圖らずも一昨五日午前三時祝融の災に逭ひ全校類燒の不幸を見るに至りしは悲むべし此夜深更の事といひ且つ火元と壁一重隔てしことなれば校內の驚愕は固より譬ふるに物なく校堂の裏手に住みて同く全燒に遭ひたる校長巖本善治氏は折柄病床に惱める夫人あるにも拘らず寄宿女學生三十餘名の身の上氣遣はしとて校舍に驅付け他に同宿の校員等と力を協せて生徒の書籍器具衣服蒲團などを取出すに忙がはしかりし爲自身は殆んど着のみ着の儘にて家具の如きは何一ツ取出す暇さへなく又校內器具も悉く燒失して只僅に樂器二個

を餘せしなりされど寄宿生は校長校員の盡力にて蒲團二三枚を燒失せし外書籍器具衣服等は大抵其の災を免かれたるが出火避難の際は生徒等敏捷く平常の衣服を落ちなく纏ひなほ各自一枚余分の羽織を重ね足袋迄者を穿つことを忘れたるものもなく屑掛を纏ひ手拭を冠り重要物品を小包にして之を抱き塾舍取締の差圖を待ち取締に導れて舍內を立ち出で四谷坂町なる理學士木村駿吉氏宅まで避難したりと巖本氏は人に語りていふ衣服調度の燒失は惜むに足らざれど得がたき書籍の悉く灰燼となりしは實に痛嘆の極みなりと又同校は始め三井銀行より特別低利な以て借受けたる者なりしが既に全く其價値を償却し今より益校規を完成せんとするに當り此の不幸に遭ふ同校のため返すへ\すも嘆かはしき事なり云々

(二月八日讀賣新聞)

◉明治女學校　過日類燒したる同校は諸事未だ全く整頓の運に至らざるも取敢へず來る十八日より同校燒跡に於て授業を始め追て校舍新築の都合の趣きなるが類燒の際は地方にある父兄等女生徒の安否を氣遣ひ見舞狀を送るものも少からぬ趣きなるも同校は豫て非常規則なるものありて斯る場合に處するの方法備はり居るを以て類燒の際も能く校規を守り最と靜肅なりしと云ふ　(朝日新聞)

◉東京府高等女學校　築地にありし同校舍は二月六日燒失せり同校は兼て飾町一丁目に新築中の處其落成まで今川小路二丁目に假校舍を設け授業するよし

◉高等女學　雲州松江の有志者は曾て校を興さんことを計畫せるが市役所に於て調査の結果市參事會に提出し異議なく設立に決したりと

◉高等女學校教育の狀況

統計學雜誌の岩井德次郎氏が、其第百十八號にて、「本邦近世教育の概況」の第四續稿の「高等女學校附男子女子各普通教育の狀況」を載せられたるもの左の如し。明治二十七年末の調査に依れは全國高等女學校を設置するものは東京、京都、大坂の三府栃木、三重、滋賀、福井、和歌山、鳥取、廣島、山口、香川、高知の十縣にして其學校の數は十四校教員の數は百六十六名生徒の數は二千三百十四名卒業生は二百七十六名なり之を前年に比すれは學校に十四校教員に百六十五名生徒に七百六名卒業生に三百八十三名を減せり此原因は主として東京府に從前高等女學校と認めたるもの丶中本年改めて各種學校と認めたるに由る故に是等の數を加算するときは前年と大差なかるへし茲に學校教員生徒卒業生の累年比較を示せは左の如し

年次	學校	教員	生徒	卒業生
明治廿七年	一四	一六六	二三一四	二七六
同　廿六年	二八	三三一	三〇二〇	六五九
同　廿五年	二七	三一九	二八〇三	四九〇
同　廿四年	三九	三三二	二七六八	四七六
同　廿三年	三一	三一一	三一二〇	三二一

本邦男子及女子の普通教育の狀況を見んか爲既往五個年に於ける尋常小學科修學の生徒高等小學科修學の生徒尋常中學科及高等女學科の生徒の數を男女に分ち之を比較するに尋常小學科は男二名に對して女一名高等小學科は男四名に對して女一名尋常中學科と高等女學科は男六名に對して女一名の修學の比例に當れり斯くの如く女子の教育の男子に及はさること遠し故に之を成年結婚期に及して算するときは尋常小學科を修めたる男子二名の內には一名の同不修學の妻あり高等小學科を修めたる男子四名の內には三名の同不修學の妻あり尋常中學科を修めたる男子六名の內には五名の高等女學科不修學の妻あるの比例に當れり世人統計の調査に依り本邦離婚婦の多きを慨嘆して三名の女子の內には一名は離婚を免かれさると言へり此原因は法律の制裁其他種々の因由ありと雖も主として前顯の如く結婚婦其者の教育なきと其母及其夫たる母の教育なきとに因り其子女に及したる結果に外ならざるへしと斷定するも過言にあらさるへし茲に普通學科修學の男女累年の比較を示せは左表の如し

年次		尋常小學科修學生徒	同上男女の比例	高等小學科修學生徒	同上男女の比例	尋常中學科(男)高等女學科(女)修學生徒	同上男女の比例
明治廿七年	男	二〇一、四六九〇	一・八六	三二、二二八五	四・二一	二、二五一五	九・七二
〃	女	一〇八、三六二一	一・〇〇	七、六四七五	一・〇〇	二三一四	一・〇〇
同　廿六年	男	一九八、〇二四九	一・九七	二八、五七七六	四・三二	一、九五六三	六・四八
〃	女	一〇〇、五三五三	一・〇〇	六、六一八二	一・〇〇	三〇二〇	一・〇〇
同　廿五年	男	一九五、九七六二	二・一五	二三、七六七六	四・三八	一、六一八九	五・七八
〃	女	九一、三六七五	一・〇〇	五、四二九七	一・〇〇	二八〇三	一・〇〇
同　廿四年	男	一九九、四二七五	二・二三	二一、二五五六	四・〇七	一、三三五五	四・八二
〃	女	八九、六四二一	一・〇〇	五、二二三九	一・〇〇	二七六八	一・〇〇
同　廿三年	男	一九八、九五六三	二・二三	一九、一三一二	四・二七	一、一六二〇	三・七二
〃	女	八七、三九一八	一・〇〇	四、四八六六	一・〇〇	三一二〇	一・〇〇
以上五個年平均	男	一九八、九五六三	二・〇九	二四、九九二一	四・二四	一、六六四八	五・九四
〃	女	九五、四五九八	一・〇〇	五、八八一二	一・〇〇	二八〇五	一・〇〇

社告

去る五日近火の節は早速御見舞御助力被成下、倘遙々御鄭寧なる御挨拶を蒙り、奉感謝候但だ不幸にして原稿は悉皆燒失いたし、前號預約致置候分も同樣にて、本號の編輯に不尠迷惑を感じ印刷延引致候段、伏して御容赦を祈る倘右申述候事情につき、曩に尊稿惠送せられ候御方にて、未掲載の分は、再び御寫送を蒙りたく、切に願上候

二月　東京下六番町六番地　女學雜誌社

直入

二月發行致すべきの處、去る五日主任記者の居室類燒の際原稿及資金を燒失せり。依て暫く休刊す。得意者の住所及拂込金額控簿も亦燒失せり。依て御一報を乞ふ、萬一廢刊の節は右金額御返却仕るべし。

東京麴町區下六番町十三番地　直入社

日本宗教第八號目錄

獨逸皇帝が揮毫して魯士亞皇帝に贈致せし有名なる宗教的東方問題の諷刺の寫眞版あり

日本宗教第八號目錄

社說

宗教的東方問題……四七七

論說

十善は是れ一切菩薩の道場一切如來能生の母なり　釋雲照…四八二

史傳

傳最澄(完)……天仙子…四八六

雜纂

基督教徒と佛教徒との對面に横はる一大事　杞憂子…四九三

アイヌ人の葬祭　ジョン、バチェラー…四九六

方鑒家小島碩鳳子を訪ふ　訪問子…四九九

問答

佛教の善惡因果問題に就て加藤博士に教を乞ふ　菅智洞仙…五〇一

思潮

佛教因果說論爭(三たび)…五〇五

劣等宗教に對する見……五〇九

天理教の使命……日曜叢誌…五〇九

宗教家の新年……傳道新誌…五〇九

排妖教……曹洞教報…五〇九

妖教の害毒……滿天教報…五一〇

昨年の宗教界……五一〇

昨年下半期の佛教界　觀潮子…五一〇

明治二十九年を迎ふ…傳燈…五一一

新年を迎へて所懷を述ぶ　密嚴教報…五一一

二十八年の基督教界…基督教新聞…五一一

仝……福音新報…五一三

宗教論……加藤弘之…五一五

宗教及教育談……元良勇次郎…五一六

道德と宗教との關係…大西祝…五一七

道德論……野澤義眞…五一八

佛教末路の狀態……楠本喜太郎…五一九

東人布教……岸巳小次郎…五二〇

耶蘇教は佛教の所謂有神論に非ず　井上圓了…五二〇

宗教思想界の前途　基督教新聞…五二〇

日本に於ける宗教問題　ブラッドフォード…五二一

當來と人物……押川方義…五二二

監獄教誨の主義……女學雜誌…五二二

臺灣の傳道……

臺灣に神道を寛傳せよ　石川舜…五二三

我佛教家は臺灣傳道の先鞭を着くべし　川崎三郎…五二三

臺灣の傳道……基督教新聞…五二四

臺灣傳道……日曜叢誌…五二四

臺灣傳道如何……救世…五二四

對外傳道女士の養成…女學雜誌…五二五

雜誌評論……五二五

●惟一○教林●十善寶窟○佛教史林○無盡燈○反省雜誌○禪學○密嚴教報○法の母○四明餘霞○傳道新誌○傳燈○明教新誌●六合雜誌○宗教○救世○宇宙神教○基督教新聞○福音新報○護教

雜誌目錄……五二八

新刊二十七種

時流……五三〇

數十件

定價一冊八錢、郵稅一錢、六部前金郵稅共四十六錢也。

東京市麹町區下六番町六番地

日本宗教發賣所

嚴本善治妻嘉志子永々病氣の處養生不相叶去十日午后死去致候に付本日午前染井墓地へ埋葬仕候右同人の遺言により葬儀の御報豫め不申上爲相濟候に付茲に紙上に陳謝して同人生前の辱知諸君に告訃す

二月十二日

親戚　松川　肇
親戚　木村　駿吉
親戚　井上藤太郎

女學雜誌定價表

前金	壹冊價　金拾錢 一年前金　金壹圓（無郵稅）
廣告料	一行一回（廿七字詰）前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 但し不道徳なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし〇郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年一月十四日內務省許可
明治廿九年二月廿四日印刷
明治廿九年二月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　嚴本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

明治廿五年三月十五日遞信省認可

明治廿五年三月十五日遞信省認可